

『心学晦荘子』翻刻と注釈

大屋多詠子・岡島由佳

【はじめに】

本稿は、曲亭馬琴の黄表紙『心学晦荘子』（寛政七年・鶴屋喜右衛門刊・北尾重政画）の翻刻と注釈である。都立中央図書館蔵本には上巻の絵題箋が残り、「昔怪談諷教訓」と副題がある。本書の題名は、序にあるように『田舎荘子』と晦日の掃除の意を掛けたものであり、寛政二年刊『心学早染草』以来の心学物のブームの流れに位置づけられる作品である。鬼と力比べをしたい朝比奈は化地蔵のお堂に忍び、狐狸らが人を化かそうとする楽屋裏を見て、この世に鬼はいないと幻滅するが、化地蔵に人の心こそ鬼と『恋娘昔八丈』を例に諭されるという筋。「鳥さしの朝ひな」を踏まえ、朝比奈が化物達をこらしめる場に工夫がある。

『心学晦荘子』には、清田啓子氏による「翻刻 曲亭馬琴の黄表紙」（『駒沢短期大学研究紀要』四、一九七六）が備わるが、未だ注釈はない。今回は再度翻刻の上で、注釈を試みた。本稿は、二〇一五年度の大学院演習の成果を踏まえたもので、執筆は岡島由佳、大屋多詠子が担当し、最終的な加筆訂正は大屋が行った。なお、本稿末尾に本誌四〇号掲載『安倍清兵衛一代八卦』翻刻と注釈の訂正・補足箇所を記す。

【凡例】底本には国会図書館本（鶯亭金升旧蔵本。画像は国立国会図書館ウェブサイトから転載）を用いた。翻刻の方針は下記の通り。
一、丁付は第一丁表を（一才）、第一丁裏二丁表を（一ウ二才）のように略記した。

一、適宜改行し、句読点を補った。会話に当たる部分には「」を付し、本文から独立した台詞や絵の説明には、（ ）で発言者・説明箇所を補った。会話以外の箇所の庵点は原文のままとした。
一、清濁は適宜補い、脱字は「」で括って補った。

一、仮名を漢字に置きかえ、元の仮名は清濁を補った上、ふりがなとして示した。原文にあるふりがなは（ ）で括って示した。ただし、序はふりがな・句読点ともに原文のままとした。

一、「／＼」「／＼」「／＼」は基本的に原文のままとしたが、漢字・仮名に置き換えた場合は、原文をふりがなで示した。

一、仮名遣い・捨て仮名は原文のままとした。
一、用例については適宜カタカナを平仮名、仮名を漢字に置き換え、清濁を補った。

一、絵については【挿絵】として簡単に解説を試みた。
なお、作中には現代の人権意識に照らして不適当な表現があるが、江戸時代の資料的価値に鑑み、そのままとした。

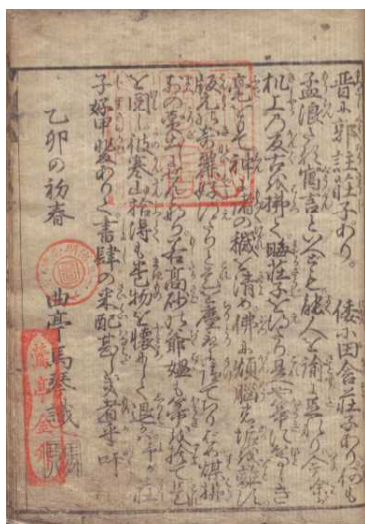
1、(一オ・序)

晋に郭註莊子あり。倭に田舎莊子あり。何も孟浪たる¹。寓言といへども。能人を論に足れり。今余が机上の反古を拂て。晦莊子を得たり。是や箒に等しき毫をもて。神に諸の穢を清め。佛に煩惱の垢を離す。版元の奇麗好。得たりとは是を塵取に請てちりばめ。煤掃前の賣出しにせんとなり。若高砂の爺嬢も箒を捨て。是を閑し。彼寒山拾得も巻物を懷にして退かば。予が莊子好甲斐ありて。書肆の采配甚しき者乎吁。

¹²乙卯の初春

曲亭馬琴識 印(馬琴)

1、(一オ・序)



【語釈】

- *1 晋に郭註莊子 『郭注莊子』は郭象注による『莊子』。郭象は晋代の人。服部南郭校訂の『郭注莊子』が広く知られる。
- *2 田舎莊子 佚斎樗山の談義本『田舎莊子』(宝暦九年刊)。
- *3 孟浪 もうらん。まんらん。いいかげんなこと。「孟浪謬言、固不足論」(『日本詩史』三)。
- *4 寓言 他の物事に仮託して、高遠な思想や教訓を述べた説話。反古 ほんぐ。ほご。「何共なき反古を二十枚続集て」(『太平記』二九・光明寺合戦事)。
- *5 晦莊子 晦日の大掃除と『田舎莊子』を掛ける。
- *6 塵取 請てごみとりの「ちりと」と原稿を「乞取」の意を掛ける。箕チリトリ 説文除糞之器(アクト)『書言字考節用集』七)。
- *7 ちりばめ 板木に彫って刊行すること。上梓する。「塵取」「ちりばめ」と韻を踏んだ。「傾城のしなを、かきしるし、梓にちりばめて、もてあつかふといへども」(『満散利久佐』序)。
- *8 煤掃 正月を迎える準備に、大掃除をすること。「しれずは煤掃まで待つし」(『浮世床』初・上)。ここでは捨ててしまう前にといいこと。一二月一三日に行なうのが恒例で、馬琴宅でも一三日前後に煤払い、障子替えなどを行った(『馬琴日記』)。
- *9 高砂 脇能物。高砂の浦で老夫婦が松の木陰を掃き清め、相
- *10

生の松といういわれなどを語る。祝言曲として歌われることが多い。「簪に等しき毫」の縁で呼び出した。

- *11 寒山拾得 唐の詩僧、寒山とその友人、拾得。画題として好まれ、簪、筆、巻物、書状などを手にした姿で描かれることが多い。「高砂」に同じく、「簪」「毫」の縁で呼び出した。

*12 乙卯 寛政七（一七九五）年。（大屋）

2、（一ウニオ）

さる程に「和田が三男^{なん}小林^{こばやし}の朝比奈^{あさひな}は、大薩摩^{ざつま}が上るりに^{おに}鬼か人かと言はれしをつくぐ^いと考^{かんが}へみれば、世^よの中に恐ろしきもの鬼より他^ほにあるまじ。何とぞ鬼と力競^{ちからくら}べして見たく思へども容易く鬼に会はれるものでもなし。なんでも鬼に会ふには化物の巢^すを訪ねるがよいと思へど、こいつも何所^{どこ}といふ当ても無し。とかく草双紙^{くさそうし}にある化物本を見たらば鬼に会ふこともあるべし。昔^{むかし}唐土^{たうど}に葉^は公^{こう}といふ人絵に描いた龍^{りゆう}を好みしかば、本の龍^{りゆう}が来た例もあると大人気なくも初春^{はつしゅん}早々^{そうそう}草双紙^{くさそうし}を買いに来る。

（朝比奈）へ、犬身^{いぬみ}鼯鼠^{ぶし}、金玉^{きんぎょ}も釣り方^{つりかた}と朝比奈^{あさひな}わざ／＼手前^{てまへ}の紋^{もん}の鶴屋^{つるや}へ訪ねて来る。
（朝比奈）へ何でも化物本を下さい。チト化物に会はねばならぬ。しかし¹⁰獏物^{ばくもの}は沢山^{たくさん}じやが化物は払底^{はつてい}と見へる。

2、（一ウニオ）



(朝比奈) 朝比奈が言ふへ茶を出す小僧も一ツ眼ならいゝに
(小僧) 化物なら百鬼夜行、揚物なら竹門、山屋のうちだ

【語釈】

*1 和田 和田義盛。源頼朝挙兵に応じて戦功をたてた。三浦義明の孫。

*2 小林の朝比奈 朝比奈義秀。和田義盛の子で母は巴御前といわれ、豪力無双とされる。歌舞伎では鎌倉の郷名を取って小林姓を冠する『歌舞伎人名事典』白水社)。通称三郎。「和田が三男小林朝比奈」(『一百三升芋地獄』)。

*3 大薩摩 大薩摩節。享保一四年正月「矢の根」初演に際し、大薩摩主膳太夫が出語りを務め大評判を取る。後、長唄の三味線を借りて語ようになり、三代目で絶えて以来、長唄に吸収される。「団十郎矢の根五郎はじめて勤る。古今の評判にて此時、大ざつま主膳太夫浄る」(『花江都歌舞妓年代記』二)。「大ざつま色身でいけるふしでなし」(『柳多留』四)。

17 (一三ウ一四才) 注参照。

*4 鬼か人か 「浄瑠璃」へかゝる所へ和田が三男小林の朝比奈は、雲に羽を伸す鶴の丸、朝日に舞ふや素袍の袖、開く武運もあらたなる、その咳の遅しき、坂東武者の勢にて、左右の髭を掻撫で／＼邊を睨んで立つたりしはへ鬼かへいゝやへ人かへウ

ム、やい「浄瑠璃」へ小林のへ朝比奈だもさ「浄瑠璃」へすさまじかりける次第なり」(明和七年二月森田座「馴染思の矢のね」『新編江戸長唄集』日本歌謡集成・九)。

*5 葉公といふ人…本の龍が来た例 春秋時代の楚の葉公は龍が好きで、室内中に龍の裝飾を施していたが、実際に龍が現れると、驚いて一目散に逃げ去ったという故事(『芸文類聚』九六『莊子』逸文)による。

*6 犬身最眞 「身最眞」に「犬」を付けて、卑下した表現。

*7 金玉も釣り方 最眞は主観的なものであるという意味。『わしは葺屋町最眞ぢやが』『こりやこりやわしは木挽町ぢやけれど、率丸もつり方で』(『客者評判記』)。

*8 手前の紋 三浦和田氏の紋は丸に三つ引両だが、浄瑠璃・歌舞伎では朝比奈の紋に「鶴の丸」(舞鶴)が用いられる。「度度の朝比奈の当り。素袍の紋には替紋の鶴の丸を付しゆゑ、昔の朝比奈の紋、三浦の三引よりは、鶴の丸と諸人覚る」(『花江都歌舞妓年代記』一)。

*9 鶴屋 鶴屋喜右衛門。江戸の地本問屋で本書の板元。紋は舞鶴の紋。通油町の店頭風景は『江戸名所図会』に描かれる。

*10 糞物 曝物。店ざらしの古物で、「糞」のように怪しげなもののこと。「柳原よるもばくもの売る所」(『柳多留』五一)。

*11 一ツ眼 一つ目小僧のこと。「アラ怖しや一目小僧よ」(『化物

判取牌』一・一眼霊符)。

*12 百鬼夜行 種々の妖怪が夜行列をなして歩くこと。「この九条

殿は百鬼夜行にあはせたまへるは」(『大鏡』三・師輔)。

*13 揚物なら竹門、山屋のうちだ 「竹門の油揚げ」は浅草田原

町一丁目の南と浅草寺の境にあった竹の木戸(竹門)で製し、
売り歩いたもの。「竹門から出るあきんど、あゝあぶらげ／＼」

(『廓大帳』二)。「鼠の油揚げは竹門のことさんすねへ」(『玉

磨青砥銭』。山屋市右衛門は新吉原揚屋町にあった豆腐屋で、

山屋豆腐は吉原名物の一つ。安永六年刊『富貴地座位』には

「竹門揚とうふ 浅草」と「山屋とうふ 新吉原」の名が並

ぶ。明和六年役者評判記『役者太夫位』冒頭の位付けで「大

上上吉 市村羽左衛門 家橘」(九代目羽左衛門。17(一三ウ

一四才) 注参照)に「毎日の大入りは見物の山屋とうふふき

や丁／御ひいきはうごかぬお江戸ぶし」とある。

【挿絵】本書の版元の鶴屋喜右衛門の店先。箱看板の注連飾りや松

飾りなど新年の飾りつけがされている。本箱や新刊の書が積み上げ

られ、店番と茶を出す小僧と朝比奈が話している。朝比奈は鶴の丸

の紋に丸に三つ引両を散らした文様の衣裳に、髪には力紙を付け、

大太刀を佩く。(一例に『一百三升芋地獄』の一才、九ウの朝比奈

も同様に力紙に三つ引両の衣装。但し鶴の丸の紋はない)。(大屋)

3、(二ウ三才)

灯台下暗しとは能く言つたものの、朝比奈我が住む鎌倉に程近き

相州の¹¹化地藏といふ¹²名代の地藏あり。此地蔵堂へ行かば¹³化物に

あふこともあるべしと、或夜かの¹⁴地藏堂へ泊まりその様子を窺

ふに、案の如く¹⁵あばらす堂の境内にちと¹⁶地藏へは遠慮なる¹⁷

なまぐさき風が吹きて、いろ／＼の¹⁸化物集まり、何か¹⁹寄合をつ

ける様子なり。但し²⁰化物の相談する所、草双紙にいたつて旧き

やつなり。

さて²¹化物といへど、狐²²狸²³猫²⁴河童²⁵青鷺のほか²⁶化物はなし。

²⁷三ツ目入道²⁸見越入道などいふ²⁹化物の片輪者は、³⁰とんと世界

に無いことゝ見へたり。

へとかく人間が臆病で、闇の夜に大木を見て見越入道のなん

のといひ³¹ふらすゆへ、おいらが仲間に無い³²化物までこしらへて出

さねばならぬ。

人間のいふやうなちよつと³³薬を被つたくらいで女に化けられる物

ではない。女に化けるは、かつらから³⁴衣装から³⁵大痛事さ。

いかに化けるが³⁶商売でも、なか／＼³⁷代が³⁸続くものではない。

(猫) いつそ化けずにかうか、³⁹化けず⁴⁰に犬では此⁴¹猫形。

(狸) い狸⁴²山か川をぞ見れば⁴³猫や⁴⁴狐の穴ばかり。

(青鷺) いちと⁴⁵五位鷺ませ。なんと⁴⁶あたらしからうがや。

【語釈】

*1 化地藏 大磯の切通し西長寺にある地藏。「小磯の町はづれに、

小橋あり。そのさきに、切通あり。右のかたに、石地藏あり。

そのかみ、この地藏、夜ごとにはけて、往来の人を、たぶらかし、なやましけり。紀州のなにがしとかや、いそぎける道

なりければ、夜に入て、こゝをとをり侍りしに、うつくしき女になりて、立出つゝ、とかくするほどに、しきりにおそろ

しくなりければ、ぬきうち打けり。さられてのちに、あらはれたり。立よりてみれば、石地藏のくび、うちおとされた

るにてぞ有ける。くびきれの地藏とぞ名付ける。かたなも、よくきれたり」(『東海道名所記』。「大磯(小磯)に行くまで

の間に並木松あり。嶋立沢あり。化地藏あり。府中に六所明神社、曾我の旧跡あり」(『和漢三才図会』六七)。

*2 名代 高名な。「名代のひやうきん者とよばれしかみさま」(『浮世風呂』三・下)。

*3 あばらす堂 荒廃した堂。「のちにはたしなみの着物もだん／＼羽が生へて、質屋の蔵へとんで行、内はしだいにあはらすどうになり」(『小栗雨見越松毬』)。

*4 なまぐさき風 気持の悪い匂いの風。「腥き風のさと吹きおくり」(『雨月物語』蛇性の姪)。

*5 寄合をつける 寄り集まつて相談する。「明日鳥の番とて、鳥

3、(二ウ三才)



とも寄合を付、おらが中間でも、どふぞはねを取たいものだ」
『楽牽頭』御寵愛。

*6 化物の相談する所…旧きやつなり 草双紙ではしばしば化物が集まって相談する場面が描かれる。『辞關戰新根』『嘘無箱根先』『信有奇怪会』等。

*7 狐 古くからずる賢い性質で人をだますなどともいわれ、狐火や狐つきなど説話や迷信が多い。また稻荷神の使いなど霊獣ともされる。「狐ハ狗に似て鼻とがり尾大なり昼ハかくれ夜出る馬骨をくハへて吹バ光を出し食を求む是を狐火といふ又玉をくハへて光をなすともいふ百歳を経て北斗を礼して化るといへり」『訓蒙図彙大成』一一。

*8 狸 狸が人を化かすという俗信は古くからあつたらしく、『和漢三才図会』三八には「老狸能変化シテ妖怪狐ト同じ」とある。『古今著聞集』一七には、古狸が人を化かす話が四話おさめられ「^{いづは}伴 眠を俗にためきねふりといふ。本草にいふ貉睡也」『倭訓栞』とある「狸寝入り」をはじめ「狸の腹鼓」「狸の金玉」などの表現に見られるように、同じく人をだますといわれる狐よりもユーモラスなイメージを持ち、「狸は狐と違ひ人を威す耳。不為怨」『譬喻尽』三）ともいわれる。

*9 猫 狐や狸同様、しばしば猫は化けるとされる。「猫の化けるは裳を被るより甚だ手重く…」『怪物徒然草』。

*10 河童 想像上の動物。「東国に。かつばと云（割注…川わつばのちゞみたる語也 小兒をしかるににもかつばともいふ）…其かたち四五歳ばかりのわらはのごとく、かしらの毛赤うして頂に^{なかへ}凹なるさら有 水をたくはふる時は力はなはだつよし 性相撲を好み 人をして水中に引込んとす 或は恠をなして婦女を姦姪す 其わざはひを避るには 猿を飼にしかずとなん」『物類称呼』川童）。川太郎とも『梅枝伝賦』。

*11 青鷺 青鷺は狐狸猫などと同様に人を驚かす化物とされる。「蒼鷺はさぎより大にして青く腹白し。雨夜には羽青く光りて人怪しみおそる」『訓蒙図彙大成』。「青鷺の年を経しは夜飛時はかならず其羽ひかるもの也。目の光に映じ嘴とがりてすさまじきと也」『画図百鬼夜行』。「青鷺首を縮めて四角の柱のごとくにして上に火を燃やしたるよふに化け人を驚かすなり。これ両の羽交の光なり」『妖怪仕打評判記』。

*12 三ツめ入道 目が三つあるという入道の妖怪。「こゝに化物のお頭三つ目入道は、近頃、箱根の先に隠居して世を楽に暮らしけるが」『怪物徒然草』。「三つ目入道、目が多けれども化物をはなれず」『浮世風呂』前・下）。

*13 見越入道 人が見上げれば見上げるほど背が高くなり、また首が長くなるという入道姿の化物。「見越入道めが化物の頭めきたるが、いつでも首を伸ばすばかり、あのくらの事は、

人間にもろくろ首といふ病で首の出るのがある。又おいらは何にでもお望みに化けるからは、化物といふは此方の事さ」

『化物仲間別』。

- *14 片輪物 ここでは三ツ目入道や首のながい見越入道のことを言った。

- *15 とんと 一向に。「ときに此お花、とんと存ぜずながら感心」
『高漫齊行脚日記』上。

- *16 世界に無い 「世界に鬼はない」を踏まえた表現か。「世界に鬼やござらぬ」(『譬喩尽』八)。

- *17 藻をかぶる 狐はしばしば藻をかぶって女に化けるとされる。「ばけの皮衣 三千年を経たる狐、藻草をかぶりて北斗を拝し、美女と化するよし」(『図画百器徒然袋』。『玉磨青砥銭』

に「小間物屋、櫛・笄に化ける藻や曝首を売りに来る」とあり、藻を被る狐の画がある。

- *18 大痛事 大きな出費。「けふは…よっぽど大いたことさ」(『高漫齊行脚日記』)。

- *19 代 しろ。代金。

- *20 化けずに犬では此猫形 「化けずにいぬ」意がかかる。「ねこがだ」は「女形」を掛けた(「女形」は「がだ」「がた」とも略す)。「がだ 若女形」(『南水漫遊拾遺』四)。ここでは化けずとも、女装した女形の猫と掛けた。

- *21 山から川をぞ見れば猫や狐の穴ばかり 「たかひ山からたに

そこ見れば、瓜やなすひの花ざかり」(『艶歌選』)のもじり。

『わらべうた』(岩波文庫)にも岐阜の遊ばせ唄として採録される。なお「高い山から谷底みれば、おまん可愛や布さらす」の形はおまん源五兵衛の心中事件に取材した流行唄として普及したという(『山家鳥虫歌』)。

- *22 五位鷲ませ 「御免下さりませ」のもじり。「鷲とは不適者だ。

まだ五位鷲ませと謝れば了簡もするが、とんだ青鷲の考へのなひ奴だ」(『怪物徒然草』。「鯛、大きにはらをたて、鯛つけ 千万なといへば、さぎ、あやまつて まつびら五位さぎませ」(『鯛の味噌津』鷲)。

- *23 あたらしからう 奇抜でもしろい趣向だ。「三百のものを、四百に買うとはあたらしいあたらしい」(『東海道中膝栗毛』初)。

【挿絵】猫、河童、狸、狐、五位鷲が地藏堂に寄り集まって相談しているのを、朝比奈が賽銭箱の後ろから見ている図。朝比奈の後ろの化地藏の右手には錫杖、左手に如意宝珠がある(一例に『一百三升辛地獄』の地藏)。着物はそれぞれ、河童は流水模様(袖には「川太郎」の「川」の字。河童の画の例としては『不案配即席料理』「梅枝伝賦」等)、狸は鼓の皮、猫は鮑の模様(鮑は猫の餌の器。猫と鮑は俳諧の付合)。狐は宝珠、青鷲は松葉の模様。(岡島)

4、(三ウ四才)

天狗といふものは元よりないものにて、^{てんぐ}天狗は則^{すなは}ち星の名なり。
 むかし、呉楚七国謀叛する時、^{とき}天狗星^{てんぐせい}ほへて梁の東門を過ぐると
 も言ひ、^{ようれい}太平記に妖^{よう}靈星相模入道と舞ひ歌ひしなどいふ説い
 づれ天狗は星なれ共人間の方からいろ／＼注^{ちゅう}文して、鼻の高い
 山伏に羽が生へてゐる絵を書いて天狗／＼と言ひふらす故、此天狗
 にも化けねばならず、^{まう}先青鸞に薬罐を被せてみれば、首の長
 いが邪魔になつて、どうか天狗のろくろ首のやうで悪し。大頭
 の張子を被せて見越入道にしてみれば、肝心の手が一本もなし。
^{てんぐ}天狗心の揉める種なりと、皆／＼大きに手こずる。
 (狸) 見越入道は、小田原提灯の皮に張子の大頭を付けて長
 き竹を差し込みて伸び縮みをする。これらは疾に人間が案じて
 おいた至つて深いことなり。これを思へば化物も一向算段の
 なきものと見へたり
 (河童) 河童曰なんだかおれが面を見るやうなことだ
 狐、道具帳を控へてゐる。
 (狐) 女形鬘が十五、薬罐が一ツ、提灯の皮、大頭が三
 ツ、まだ／＼こんなことでは道具が足らぬ。
 (驚) ハイ／＼驚殿のお笑ひ草。
 (狐) 那須野の原の野干とはこのことだらう

4、(三ウ四才)



【語釈】

- *1 天狗は則ち星の名なり 「天狗 テング 星名」(『書言字考節用集』)。
- *2 呉楚七国叛逆 「呉楚七国叛逆し、彗星数丈、天狗梁の野を過ぐ。兵起るに及び、遂に其の下に伏尸流血す」(『史記』二七)。
- *3 天狗星 流星の一種。「星の中に天狗星と云ふあり、天狗流星とも名く、大流星と名て光りものの如にして」(『塵袋』)。
- *4 太平記に妖靈星相模入道と舞ひ歌ひしなどゝ 「或夜一献の有けるに、相模入道数杯を傾け、酔に和して立て舞事良久し……田楽共十餘人、忽然として……舞歌ひける。……或嘴勾て瑠の如くなるものもあり、或は身に翹在て其形山伏の如くなるものあり……天下將に乱れんとする時、妖靈星と云ふ惡星下つて災ひを成すといへり」(『太平記』五・相模入道弄田楽事)。
- *5 先青鷲に薬罐を被せてみれば 「或は盥、又はやつくわんなどに化けたり」(『軽口大矢数』狸の七化) 等とあるように化物は薬罐に化けることがある。また「薬罐頭」も意識するか。
- *6 どうか どうやら。何だか。「ほんにいつものよふに元氣もござんせん、どふか顔のいろもわるいよふでござんす」(『傾城買二筋道』冬の床)。
- *7 ろくろ首 長い首が自在に伸縮する化物。「ろくろくび大ぜいにくびをのばさせ」(『化物太平記』中)。
- *8 天狗心の揉める種なり 「結句心の揉める種」、結局、やきもきする種、という意を掛けるか。「心づかひの信切は、うれしいやうで仇吉が、結句心のもめるたね」(『春色辰巳園』四・八条)。
- *9 小田原提灯 折りたたみでできる円筒状の提灯。「土産 提燈俗に小田原挑灯と称するものはなり」(『新編相模国風土記稿』二四・足柄下郡)。
- *10 算段 工夫すること。「寄るも障るも錢を遣ふ算段ばかりで」(『浮世風呂』三・下)。
- *11 おれが面を見るやうな 見越入道の坊主頭と河童の皿が似る、という意味か。
- *12 道具帳 舞台に必要な道具について書き留めた帳面。
- *13 驚殿のお笑い草 「ただいまのお笑い種」を掛けるか。「ただいまのお笑い種」は、往来を二、三人で掛合いの芝居をして歩き、他の一人が「ただ今の御笑い草」と言いながら錢を貰つて歩いた。「おい、只今のお笑ひぐさや、首を廻す親孝行とは訳が違はあ」(『処女評判善惡鏡(白浪五人女)』五幕)。
- *14 那須野原の野干 野干と薬罐をかける。那須野原の狐は「殺生石」で知られる狐のこと。鳥羽天皇の寵姫玉藻前に化けた金毛九尾の狐は陰陽師に正体を見破られ、射られて石化した

が、後に玄翁和尚が石の霊を成仏させたという。「殺生石セツシャウセキ 近衛院宮女化妖狐奔野州那須野。……義明射而殺之。狐靈又化為毒石触之則人民禽獸皆死。詳源翁伝記」〔書言字考節用集〕二二。

【挿絵】右手では狸が竹棒の先に張り子の見越入道の大頭を被せて掲げている。鏡を見ながら、その大頭を見上げる河童が左手で頭の皿に触れている。左手には、女形鬘と男用の鬘が据えられ、『一生入福兵衛幸』の小道具衣装の損料貸屋の店先にも同様の画有)、その手前の床には丁髷が落ちてゐる。「田」模様の着物を着た青鷺は菓罐をかぶり、正座する狐の膝には道具帳が置かれている。その後ろの几帳には藤と菊の模様の女物の着物が掛かっている。(大屋)

5、(四ウ)

又人間に先を越されて、亀山の化物といふ張子人形があればこいつにも化けずばなるまいと河童を戸板へ乗せ、輝へ播り粉木を結はへつけ、彼が家の骨接ぎ膏薬を戸板の裏へ付けて跳ねさすれど、河童は岡へ上がつてはいたつて身重きものにてその具合甚だ悪し。

(河童)「此いきでは、輝の膏薬が尻へ付いても跳ねられさうなものだ」

(河童)「かかう戸板へ乗つた所は、昔原伝授の鶏といふ身の上だ」

(狐)「河童へやろく、評判」

(狐)「戸板アおつりきだ」

5、(四ウ)



【語釈】

*1 亀山の化物 天明から文化頃、江戸浅草雷門内日音院の門前で売られた玩具。現在も仲見世通り「助六」で販売する。「猿

面人体の紙人形に笠をかぶせて割竹の上のせ、底に糸の仕掛があつて、それで飛んだりはねたりして踊るように拵えた玩具」(『川柳江戸名物図会』三)。「ひとつ長屋の佐治兵衛どの、四国を廻つて猿となる」と数え唄に合わせる。「ヲホホホホホこれかよと、たばこぼんの下からだしてやるは、かめやまのだけもの」(『素見数子』三)。「亀山の化物より速やかなり」(『安倍晴明一代八卦』。なお河童は猿に似るとされる。

「猿猴に似たるが故に河太郎もえんこうといふ(『物類称呼』)。

*2 骨接ぎ膏薬 馬に悪戯をしようとした河童が、馬の主人に腕

を切られるが、その腕を返してもらう代わりに、骨を接ぐ膏薬の秘方を伝えたという伝承に基づく。『西播怪談実記』三「河虎骨継の妙薬を伝へし事」参照。

*3 罌の膏薬 あかぎれを治すためのあぶら薬。「はい御帰りや

わづらひは何にて候やといへば、さればかごかきはあたまに^{アカガリ}餅がきれ、今老人はかいながつけて尻がいたむほどに、皆かうやくをつけて帰りぬと」(『新竹斎』一・三二)。

*4 菅原伝授の鶏 延享三年(一七四六)初演『菅原伝授手習鑑』

二段目東天紅の段で、鶏を無理矢理鳴かせ、夜明けと錯覚さ

せようとする場面がある。その際、鶏を挟み箱の蓋に乗せて水に浮かべて鳴かせるのが、この場面に似ているとした。

*5 戸板アおつりきだ 「こいつはおつりきだ」の洒落。一風変

わつていて趣があること。「こいつはとんだおつりきなことをいふやつだ」(『人心両面摺』)。

【挿絵】 播り粉末の付いた戸板の上に両手をつけて座った河童は裸で腰蓑を着けた姿。脇に同じく控える狐は見世物の口上といった風情で扇子で頭を叩いている。(大屋)

6、(五才)

人間を化かす時は^{げん}馬の糞^{ふん}を牡丹餅^{ぼたんもち}だと言ふて喰はせるなど言へど、中^り／＼^り利口^{りこう}な人間が馬の糞^{ふん}などを喰ふものではなし。やはり牡丹餅^{ぼたんもち}を本^{ほん}当^{とう}に拵^{こしら}へねばならず。それも砂糖^{ざうとう}を随分^{ずいぶん}沢山^{たくさん}入れねば喰^く手がなし。しかし牡丹餅^{ぼたんもち}を喰^くわせたとして化かす時の呪^{まじな}ひにもならねど昔^{むかし}から言^いひ伝^{つた}へなれば化物^{ばけ}も廻^よん所^{ところ}なく面倒^{めんどう}な目^めをして牡丹餅^{ぼたんもち}を拵^{こしら}へる。

(猫) へ黄^きな粉^{こな}は少^{すく}ないが、良^よい小豆^{あづき}ほど喰^くい手^てがないによ

(狸) へ人間^{げん}が馬^{うま}の糞^{ふん}で、承^{しょう}知^ちしてくれ^うなば、こ^めんな面倒^{めんどう}な目^めは

せぬに

(猫) へこ^{ところ}うした所^{ところ}は道化^{どうけ}百人^{ひゃくにん}一首^{いっしゅ}の絵組^{えぐみ}と言^いふものだ



【語釈】

*1

馬の糞を牡丹餅 「ぼた餅を馬糞の様に下女がもり」(『柳多留』六七・三三)。「女郎が狐だから、竹村でも馬糞を売りそうなものなれど、それでは冥利が悪ひといつて、やつぱり上餡を売る」(『玉磨青砥銭』)。落語「王子の狐」でも牡丹餅を馬の糞かも知れないと疑う(但し出典の「初心な狐」『笑眉』では「料理」を「馬糞」と疑うが、牡丹餅とは明記しない)。上等でない菓子子を「馬糞菓子」とも。「子供たらしの馬糞菓子子を

紅毛の福りんとふと名号て」(『中洲雀』)。牡丹餅はもち米と

うるち米とを混ぜて炊き、軽くついたものを丸め、小豆餡、黄な粉などをまぶしたもので、おはぎとも。

*2

道化百人一首 近藤清春画『道化百人一首』(太平書屋『ど

うけ百人一首三部作』に「せみ丸 これやこの喰ふも喰はぬも隣ではつくもつかぬも牡丹餅の音」があり、「だまつてくはしやれ隣へ聞こゆるに」と描り粉木で桶の米を突く母と、牡丹餅を頬張る子供達との三人の構図に似る。

【挿絵】

右手の猫は前掛けを付け、桶の米を搗き、左手の狸は餅に小豆餡をまぶしている。奥の振り袖姿の猫娘は黄な粉と小豆餡のぼた餅を入れた重箱の一段を持つ。三匹ともたすき掛けをしている。

『道化百人一首』の構図に似る。

(大屋)

7、(五ウ)

みずの素麺といへど素麺にするほどみずを掘られるものでもなし。掘つた所がこいつも食い手がなければ、麺類は、堅食にして蕎麦屋から取り寄せる。人間一人化かすにはよほどの物入りと見へたり。

(蕎麦屋) へかけと盛りが十六来やした

(蕎麦屋) へ又寄り合いかへ

(河童) へ、蕎麦だの祖父だのと大騒ぎだ

(河童) へ、芝居の飯は綿でもすむが、おいらは本の物を使はねばならぬ

(蕎麦屋) へ、今こひもりかけがつばはどうだね

【語釈】

*1 みずの素麵 「狐の蕎麦」を指すか。「狐の蕎麦」は蚯蚓の

戯称。狐につままれた者が蕎麦と思って食うのでいう。「ちゃんころがないと狐のそばをほり」(『柳多留』六五)。

*2

慳食 汁で煮た饅頭または蕎麦切を盛切にしたもの。「慳食は唯俗に覚えたるやさしみなき意にて、一椀づつ盛あるを食ふ人の心にまかせて勉もせざるゆゑなり。其呼声にも一杯六文かけねなし現金かけねなしといふこと、其頃のはやりなり。

外に持運ぶに膳を入れる箱はけんどん箱なるを、やがてけんどんとばかりいひ、其箱の蓋の如きを、けんどんぶたといふ」(『嬉遊笑覧』。「寛文の頃、けんどん温鈍、盛に行はれしゆへ、蕎麦も温鈍にならひて、けんどんにせしなり。けんどんとは(略)一杯盛切にして、かはりを出さず、使もせざるより、けんどんとはいひし。これを便利なりとして賞玩し下々の者とりはやし、盛に行はれしより、温鈍蕎麦屋などといふもの遂々に

7、(五ウ)



出来ぬ」(『善庵随筆』)。

*3

物入り 費用のかかること。「昨日は鶴が岡の八幡へ御社参。

おびただしいお物入りアア、其銀の入目が欲しい」(『仮名手本忠臣蔵』二)。

*4

かけと盛りが十六 「かけ」は汁かけ蕎麦の略。「もり」は盛

蕎麦の略。蕎麦の値段の十六文と、注文の数が十六をかけるか。「蕎麦と奈良茶の十六文ハ、上代よりの御定まりにして…下直に付が世の習ひ、おつかぶするも商人の習ふになれる」

『落断懸鎖』卷三・冬至梅。

*5

蕎麦だの祖父だのと大騒ぎだ 蕎麦に祖母をかけ、祖父（おじ）を引き出すか。「半兵衛夫婦つどつどにけふの御苦勞世話の礼。何やら物を云いたげに、振り向く宿老を目でとどめ稚子抱きおぢうばは一間へ」『艶容女舞衣』下）。

*6

芝居の飯は綿でもすむ 芝居に使う飯は、綿を使うことから言つたもの。「飯 飯はやはらかにて綿のごとく椀のうちに丸くかたまるをこのむ綿を飯にたいて食ふか又飯のすへたるものを綿とするかさつぱりわからずそのめしもむしやう椀のうちをかきまわすばかりにて一膳までは食わずやき飯も大やき飯なれば一口食ふなりさうかと思へば飯びつづるみにかきこんで食ふ人もあり 一向気のしれぬことなり」『戯場訓蒙図彙』。

*7

今こひもりかけがつば 「伊賀越乗掛合羽」と「今来い」、蕎麦の「盛り」「かけ」「河童」を掛けた。奈河亀輔作『伊賀越乗掛合羽』は安永五年（一七七六）大坂、中の芝居嵐七三郎座初演。一幕。十一段に「三十日蕎麦を十人分云うてくるサ」「ト……久兵衛、饅飩屋の箱を下げ出る」とうどん屋久兵衛が登場、蕎麦を運んでくる場面がある。

【挿絵】 右図は蕎麦屋と河童が話しているところ。蕎麦屋の印半纏

と提灯には「十一」とある。『伊賀越乗掛合羽』の十一段も匂わすか。時代は下るが、文化十二年の見立番付「江戸の番付名物商人評判」には「そば 宇田川町 十一や」の名が見える（『川柳江戸名物図会』五巻付録）。印半纏の襟と慳食箱の側面には「浪」、慳食蓋には「さゝなみ」とある。（例えば『化物大江山』の最終丁にも「まいづる」と札をつけた同様の慳食箱。『的中地本問屋』最終丁で一九が蕎麦を食べる場面にも「にしき」の札の慳食箱。）（岡島）

8、（六才）

さても四五日の騒ぎでやう／＼道具立が揃ひ、ずいぶんうつかりひよんとして、三十二文からつらが抜けたやうな人間を化かす。蔵作りは紙帳を釣つて間に合はせ、そのほか波幕、小道具の、かゝり、やはり芝居の道具立のごとし。いづれ夜の仕事と見へたり。

「此うちは入口がしれぬやつさ、どうだらう。」

（客）「これは／＼お迎いと、伊丹諸白だ。」

（狐）「その諸白も馬の小便ではなしさ、本の物／＼。」

（狸）「サア／＼こつちへおいで／＼」

【語釈】

*1 道具立 歌舞伎舞台用語。諸種の造り物の装置。「まづ浮名を



かれて：膏葉代が鏝百ならば、無慙や肋一枚が、三十二文と知られたり」(『近世説美少年録』第一輯卷四・第六回)。「一子を授くるなりと、ずく銭一すじ出し給ひ、百の口を三十二文ぬいて授け給ふと思へば」(『押絵烏癡漢高名』)。

* 4

三十二文のつらが抜けたやうな 「つら」は「蔓」か。「百の口が抜ける」は銭百文のうちの一部が抜けて不足がある意から、愚かな、知恵が足りないことを指す。「そなたの親父はおれ同様百の内が抜けた人、お袋とても同じこと」(『梅雨小袖昔八丈』三幕)。「百の口が二十四文抜けた」という表現もある。「なんと、太郎は百の口が二十四文ぬけたんべい」(『出類題』馬鹿)。ここではこれを誇張して、九六の三分の一の三十二文の銭縹の紐(つら)が抜けた、すなわち、「百の口が抜ける」よりも、もっと智恵の足りないという意か。また7(五ウ)の続きで大蒸籠(大盛り)の蕎麦が三十二文であったことを踏まえるか。「親分の頭へよく饅頭をぶっかけたな。せめて三十二文盛りなら不承もせうが、親分を見くびって、よく二八をぶっかけたな」(『助六廊夜桜』)。

* 5

蔵作り 土蔵のように四面を土で塗りこめた家屋。土蔵造り。「ひらぎの長がくらづくり。風にも散らず日に枯れぬ、黄金花咲く松と梅」(『傾城酒吞童子』三)。

* 6

紙帳 白い紙を張り合わせて作った蚊屋。「こちは蚊屋は及び

千五百両にて身請てをし、心中の道具立てを買い集める」(『江戸生艶氣樺焼』)。

* 2

うつかりひよん うかうかとして、の意。「巾着切られ徘徊して、うつかりひよんとしている油断を見すまし」(『孔子縞于時藍染』上)。「うつかりひよん 浮の義賊ウツカリヒヨン内とも云」(『俚言集覧』)。

* 3

三十二文 百文と称して実際には九十六文が縹に通されていたことに基づき、その三分の一に当たる額。「あばら三枚、折

もないせめて嫁入の紙張なりとあやかりたい」(『五十年忌歌念仏』中)。

*7 波幕 歌舞伎の道具幕の一。波模様を描き、海や川を表わす。

「そも此しゆかうといつば、正面二間のあいだに波幕をみせ、西の大はしらのきはに松の太木あり」(『荒山水天狗鼻祖』)。

「浪幕 一面に浪を染たるまくなり」(『楽屋図会拾遺』下)。

*8 小道具 歌舞伎の舞台で用いる家具などの道具類。

*9 かゝり 作り。

*10 道具立 芝居に必要な道具を整えること。「天人衆を釣下る道具立の大物入」(『根無草』後)。

*11 夜の仕事 遊女のことか。この場面は、遊女に化けた狐狸が

お客を招いている様子か。

*12 お迎え お迎え。「お向ひがてら行て来ふと」(『伽羅先代萩』四)。

*13 伊丹諸白 「伊丹」を「痛み」にかけて、「いたみいます」

の意でいう洒落。伊丹は銘酒の産地として知られ、諸白はよく精白した白米を用いた麴と蒸米で醸した酒。「津の国伊丹諸白を作りはじめて家久しく」(『西鶴織留』一・一)。江戸時代には「伊丹諸白」が全国的に出回り、江戸では「下り酒」として賞味された。『御影でおもしろふ、芝居を見やした』『これは御礼で、伊丹諸白』(『辰巳之園』)。

*14 馬の小便 出の悪い下等の茶や、なまぬるい茶などをあざけ

つていう語。「夕部も馬の小便をみるよふな酒をがぶ々がぶ々、やがて一斗ちかくも喰ツたろうよ」(『身振嘶寿賀多八景』朝がへり)。

【挿絵】紙帳を釣った遊女屋の図。松や制札も道具立てと見える。

その前に狐と狸の化けた遊女(裾模様は藻に撫子で、尻尾が見えている)がいて、扇を広げて駆け込んでくる黒羽織の客を迎えているが、これが「三十二文からつらがぬけた」ような人間か。(岡島)

9、(六ウセオ)

ばけもの 化(け)物(ぶ)も化(け)かすが商(しょう)売(ばい)とはいへど、商(しょう)売(ばい)にしては悪(わる)い商(しょう)売(ばい)にて、人間(にんげん)ひとり化(け)かすには大(お)きに物(もの)の要(い)ることにて、化(け)かしてしまつた翌(あくる)朝(あさ)、化(け)物(ぶ)の方(かた)が化(け)かされたやうな心(こころ)持(も)ちにて、蕎(そば)麦(あ)屋(や)酒(さけ)屋(や)衣(い)裳(しやう)の損(そん)料(りやう)の掛(かけ)取(とり)、大(お)晦(みそ)日(にち)の如(ごと)く押(お)かけたて、催(さい)促(そく)にはたられ、化(け)物(ぶ)どもほつとして、なか／＼安(やす)金(がね)にては化(け)かされぬ、とこり／＼とする。

(狐)へどうぞ晦(みそ)日(にち)まで待つてくんせへ。ア、これ(あな)穴(あな)へでも入(はい)りたい。

(掛取)へ、十日(みそ)に晦(みそ)日(にち)にはらひ給(たま)へ／＼
(掛取)へ、そも／＼これは大(お)過(か)の掛(かけ)取(とり)料(りやう)代(だい)、払(はら)つた／＼

(蕎麦屋) へ^い言延しても延ばされぬ、⁸蕎麦屋の担ぎがぶつ^{かけ}掛
取、なんと盛りじやア^{ごん}ごんすめへ。

(猫) へ猫は人間の手近くに住む故、人間のするを見様見真似
に¹⁰箒を立て、掛取をかへす呪ひをする。

(狸) こうもあるうか。へ¹¹世の中に借りほど怖きものはなし狸
寝入りも留守もきかねば

【語釈】

*1 損料 衣類や器物などを借りた時、それがいたむ代償として
支払う金銭。「鬼神をしゅびよく退治めされたなら、そんりや
うをつけて千本の手を九ツの鐘をあいづにまっているよ」『大
悲千祿本』。

*2 掛取 掛け売りの代金の集金人。「折角来ても債主との喧嘩
を聞ては、さてさてつらいありさま」『大千世界楽屋探』下。
*3 安金 安い金額。「安金で出来ぬ中洲の御手料理」『柳多留』
一一六。

*4 穴へでも入りたい 恥ずかしくて合わせる顔がない意の「穴
があったら入りたい」と、狐が穴居することを掛ける。「穴居
雨を知り、巢居風を知るといふ千年のふるきつね」『安倍清
兵衛一代八卦』。

9、
(六ウ七オ)



*5 十日に晦日にはらひ給へ 祝詞の「祓いたまへ、清めたまへ」と十日、晦日に支払いをする意を掛けた。

*6 大過 多過ぎること。

*7 言延しても延ばされぬ 言い逃れと支払いの延引と、蕎麦がのびる意を掛ける。「貴様の長ぜりふのうち、気の毒な鯉鮓が延びる」(『助六由縁江戸桜』日本古典文学大系所収)。

*8 蕎麦屋の担ぎ 蕎麦屋の出前持ち。「助六」の蕎麦屋福山の担ぎを踏まえる。

*9 ぶつ掛取 「打掛(ぶっかけ) 蕎麦」と借金の「掛取」を掛ける。「寒からぶっかけを食てへのと、さんざつばらあばれ食をして」(『浮世風呂』二・上)。

*10 箒を立てる 長居の客を早く帰す呪い。「箒を立てまじなへば、量算に待侘び」(『遊子方言』夜のけしき)。「いくらまじなつても、かへるものじやアねへ」(『早替胸のからくり』箒を逆さに立てる画有)。

*11 世の中に借りほど怖きものはなし狸寝入りも留守もきかねば 狸寝入りも留守も効き目がない、借金ほど怖い物はないということ。「世の中に蚊ほどうるさきものはなしぶんぶといひて夜も寝られず」(『甲子夜話』二)を踏まえるか。

【挿絵】証文らしき書状と「衣裳損料」と書かれた帳面を前に三人

の掛取に責められる化物達。桜模様の女形の衣裳と鬘が、脱ぎ捨てられている。掛取のうち左端は7(五ウ)と同じ蕎麦屋で印裨纏の胸には「浪」(「さざなみ」の浪か)、襟元に「十」(五ウでは「十一」の字(もう一字不明)。掛取を早く帰すための呪いに箒を逆さに持つ猫の着物の模様は桐、帯は亀甲に麻の葉か。狐・狸・河童の衣裳は以前に同じ。(大屋)

10、(七ウ八オ)
あさひなばけものがくや 朝比奈化物の楽屋を見抜き、誠に諺の如く野暮と化物はない世界也。まして鬼と言ふものあるべき筈はなしと悟り、地藏堂をぶら／＼帰らんとせし後より本尊地藏菩薩こりや／＼朝坊待ち給へ／＼と呼びかけ給ひ、長々と御談義をお説きなさる。

(化地藏)へ夫世の中にあるも化物ないも化物なり。わしがことを化地藏と言へど、わしは化けたことはなけれど人間の臆病者手前の心に化かされて、わしを化地藏／＼と言いますが、化物はすなはち人間なり。その化物の始まりは人の心、心はこれ心の臓にて心包絡と言ふ人の臍腑にしてこの玉いろ／＼に化けるものなり。されば十二因縁に胎内より死するまでいろ／＼に化ける凡夫の心を十二にわかち十二因縁と説いたじやないが、生まれぬ先まづその宿る形はこの錫杖の如し。既に人間の形

を元その魂魄備つてよくも化け、悪しくも化ける。その心の鬼になると言ふ始まりは斯くの如しとかの心の臓に象つて持たせ給へる玉の内よりいろ／＼の形を見せ給ふ。

(子守の男児) 〱薩摩芋が喰いたいと思ふ心の鬼

(丁稚) 〱どら焼き・〱おこしが喰いたいと思ふ心の鬼

(子供達) 〱椎の実を喰いたいと思ふ心の鬼

(女) 〱指の輪を欲しいと思ふ心の鬼

(老人) 〱銭金を欲しいと思ふ心の鬼

(朝比奈) 〱此玉は唐の芋が夢を見るといふものだ

(化地藏) 〱唐茄子の蜃気楼も良からう

〱飢へ餓ゑたるを餓鬼と言ふ。餓鬼は飢へたる鬼にして子供の喰

いたい飲みたいと思ふが鬼になる始まり。これを思へば子供衆

意地を汚くしてねだりことを言ふまいぞや

【語釈】

*1 野暮と化物はない 箱根の開所から東には化物も気のきかな

い人間もないという江戸つ子の江戸自贊の諺。「諺に、はこ

ねからこつちに、やばと化物のはなしといひつたへり」『金

唐草』。

*2 朝坊 朝比奈のこと。

*3 御談義 説法を聞かせること。「聖教の談義する僧法もなかり

10、
(七ウ八オ)



しかば」(『源平盛衰記』八・法皇三井灌頂事)。

- *4 **心包絡** 魂の宿るところ。心。「しかればわづかの此しとねに、しんほうらくのをきやうにて、地獄も見つ極楽もまた仙境も見ゆる也」(『根元曾我』三)。

- *5 **十二因縁** 仏語。無明・行・識・名色・六処・触・受・愛・取・有・生・老死の一二ゆえに生物があると考える。「これぞ五智の宝冠にして、十二因縁の髻を取つて是れを戴く」(『勸進帳』。「先づ揚屋の数は十二軒十二因縁を表したり」(常磐津『辰鴛色相肩』)。

- *6 **生まれぬ先まづその宿る形はこの錫杖の如し** 『女重宝記』に十月目までの胎児の姿を載せるが、四月目までは仏具の形で表され、初月は「しやくじやうのかたち」として錫杖の図を載せる。

- *7 **錫杖** 杖の一種。化地蔵の足下に置かれている。「いで一祈りと錫杖振り立いらたか数珠さらり／＼と押もんだり」(『女殺油地獄』中)。

- *8 **心の鬼** 邪心。煩惱。「また獄卒は面／＼の心なり、欲い／＼の欲心より心の鬼に責られて苦む事あり、たゞ慎むべきは心の鬼也」(『彼岸桜勝花談義』)。

- *9 **心の臓に象つて持たせ給へる玉** 宝珠の形で描かれる。「心」
「心包絡」は宝珠に似た形で描かれる(『和漢三才図会』)。

- *10 **どら焼き** うどん粉の焼皮二枚の間に粒餡をはさんだ餅菓子。銅鑼の形に似るのでいう。「されは畑右衛門が伴田の吉は早四つ五つの頃においしいほしいの枝葉出るにしたがひ、毎日目先に出るどら焼薩摩芋おこし饅頭或は夙独楽全ての遊草が生繁り、黒砂糖の肥が過て五疋の虫つき」(『種時三世相』)。

- *11 **おこし** 蒸した糯米を乾かし、炒ったもの。また、それに胡麻や胡桃などを加え、水飴に砂糖や蜜などをまぜたもので固めた菓子。「饅頭餅飴オシロイなんどその中にも売めぐるに」(『狂歌咄』五)。

- *12 **椎の実** 食用。「ちかごろ廊中へしみのみをうるばばアの来ること、みなさまござんじ也」『大門雛形』二。「へへ椎実シノミ一袋たった四文」(『浮世床』初・上)。

- *13 **指の輪** 指輪。「今のさはぎでゆびの輪をおとしたそふだ」『傾城買四十八手』見ぬかれた手。「振袖の天人、指の輪の気取りにて、地蔵様に耳の輪をねだる」(『根無草筆苅』)。

- *14 **唐の芋** 里芋の一種。「芋…唐芋は荖長大にして白し。故に白芋とも云」(『大和本草』五)。「唐の芋三つならべばたからもの」(『柳多留』明元天1)のように、宝珠と唐の芋を見立てる川柳もある。

- *15 **唐茄子** 南瓜 なんきん「南京瓜」 東埔寨瓜 かぼちや 唐茄子 タウナス 共俗称…似

老茄子^{ひねなすび}之形色。故俗又名唐茄子『和漢三才図会』一〇〇。

なお、馬琴は「とうなすといふもの箱根より西になし」『羈旅漫録』とする。化物と野暮の縁か。

*16

蜃氣楼 昔、中国で、蜃が気を吐いて楼閣を描くと考えて名づけられた。ここでは宝珠を唐茄子に見立て、それが蜃氣楼を吐き出しているようだといったもの。「赤城震起て、蜃氣楼を抬出し、緑波天に続きて、珊瑚島をめぐれり」『椿説弓張月』拾遺・四六回。

*17

餓鬼 常に飢えと渇きに苦しむとされる餓鬼道に落ちた亡者のこと。食物をむさぼるところから、子供を卑しめてもいうが、ここでは両者を踏まえる。「乳のみくさるがきめがあるさかい、ゑらいなんぎなめにあふたわい」『東海道中膝栗毛』六・下。

【挿絵】煙管をくわえる朝比奈の隣で、化地蔵が心の鬼について談義する。地蔵の指さす先には宝珠の形の心包絡から吹き出しが五つ描かれ、食欲・物欲・金銭欲などが描かれる。(大屋)

11、(八ウ九オ)

さて今の¹¹食いたひ、飲みたひ、欲しいと思ふ¹²心がいつしか鬼¹³なつてこれより¹⁴家も吞み¹⁵人も食ふ。その心の鬼が¹⁶狐にもなり、

狸^{たぬき}にもなり、猫^{ねこ}にもなり、鼠^{ねずみ}にもなり、鳥^{かかし}にもなり、鳶^{とび}にもなる。¹⁷うそならばこの次¹⁸をあけて見給へ。狐狸^{きつね}は獣^{けだもの}にてはさら／＼怖いものではなし。

人の心の鬼^{おに}ほどおそろしきものはなし。されば哥にも¹⁹有情無情^{ぜうぜう}木草^{くさ}もすぐに大江山人^{おに}に²⁰人なし鬼に鬼なし(化地蔵)へ²¹仏の目からみる時は²²煩惱^{ぼんのう}の犬ころの鬼人間^{おに}の化けたのは此通り²³見ゆるなり。

(鬼)へおれがなりは²⁴大江山の²⁵胴人^{どうぎやう}形ときてゐる。²⁶草^{くさ}をもたぬ神農^{しんのう}といふ²⁷身もあるが、人に言はれぬうちに言つておこ。

食いたひと思ふおこしは²⁸眉^{まみ}となる。

食いたひと思ふ²⁹薩摩芋^{さつまいも}は角^{つの}になり。

欲しいと思ふ³⁰指^{ゆび}の輪^わは腕^{うで}の環^{くわん}となる。

欲しいと思ふ³¹小判^{しょうばん}は舌^{した}となる。

【語釈】

*1 食いたひ、飲みたひ、欲しいと思ふ心 10 (七ウ八オ) の人々の煩惱。「人に善悪の病あり、飲みたひ食ひたひの病、欲し

行たひの病、数ふるに暇なし」(『加古川本蔵綱目』)。

*2 家も呑み 身代を潰すの意か。「さてその跡へ乗り込んで、糸屋の身代のんだ上」(『心謎解色糸』二幕)。

*3 人も食ふ 酒吞童子の伝説などを踏まえる。「比叡山に上りしに、三千坊の乳房を夜な／＼吸て廻りしに、終に生血を吸出しに、うみは忘れて血汐を好む、鬼稚児なり」(『酒吞童子枕言葉』)。

*4 狐になり狸にもなり、猫にもなり鼠にもなり、鳥にもなり鷲にもなる 九丁ウ以降に出る、淨瑠璃『恋娘昔八丈』の登場人物をなぞらえた化物のことを指す。

*5 うそ 鳥の「鶯」と「嘘と思うならば」の意を掛ける。

*6 有情無情草木もすぐに大江山 『太平記』卷十六・「日本朝敵の事」の条に、紀朝雄の詠歌として「草木も我が大君の國なれば何處か鬼の住處か鬼の住處なるべき」や、謡曲『大江山』の「土も木も我が大君の國なれば何處か鬼の宿りなるなむ」とある。また『俳諧類船集』(延宝四年)・鬼「古今序にめに見えぬ鬼神をもあはれとかけり。草木も我大君の國なればいづくか鬼のすみかなるべき。是はむかし伊賀國に鬼の人を損する事有しに。此歌によりて其事やみにきと云々、徒然草に伊勢の國より女の鬼になりたるをあてのぼりたると有。菅丞相は比叡の山にて姿俄に鬼となれり」とあり、これらを

11、
(八ウ九才)



踏まえた表現か。「土も木も我が大王の国なれば、いづくか鬼の宿と定めん」(『化物大江山』)。

*7

人に人なし鬼に鬼なし 「人有る中にも人無し」を鬼にも敷衍した。人は大勢いるけれども真の人物がなかなかいないように、鬼にも本当の鬼はなかなかいない。人の心の鬼の方が恐ろしいという意。「人有る中にも人無と申せ共」(『仮名手本忠臣蔵』一〇)。

*8

煩惱の犬 煩惱が人につきまとうことを、まといつて離れない犬にたとえていう語。「忠孝全き竹杖にて、煩惱の犬を打畜生道をまぬかれて、天堂に生るるかたち」(『昔話稲妻表紙』五・一六)。

*9

胴人形 内部の血管や内臓の様子が見えるようにつくられた、張子の解剖人形。菓屋の店頭に置かれた。「あなたはお仙人様でござりますか。私は又、売薬見世の胴人形かと存じました。これは確かに夢でござりませう。何故と申に、あなたのお顔が不憚ながら牡丹餅のやうだからさ」(『金々先生造化夢』)。
「売薬屋の銅人形見たやうに看板にされたばかりもつまらねへぢやアねへか」(『浮世風呂』三・下)。

*10

草をもたぬ神農といふ身もある 神農は医学、薬学の祖とされる。神農が手に薬草をもっていることを踏まえた表現。草を持たない神農にも見えるということか。「神農の胴人形、右

に茶匙を持左りに薬草をとりたるをすゑおきぬ」(『昔話稲妻表紙』四・一三／同挿絵参照)。

*11

身 恰好。「ふくらはぎへちからを入れて、前へかがんで、ソレ今のやうにかういふ身で歩行だ」(『八笑人』四・追加上)。

*12

薩摩芋は角になり 薩摩芋を鬼の角に見立てる。「薩摩芋の煙の出るのは、湯気上がった鬼の角ときてゐる。ア、一本しでやりたい」(『箕間尺参人酩酊』)。

*13

腕の環 鬼は腕輪をはめた姿で描かれることが多い(『一百三升芋地獄』『桃太郎発端話説』等参照)。

*14

小判は舌となる 小判は江戸時代発行の「一両」通用の金貨幣で楕円形。舌は形状から一両小判のことを指す。「小判／＼と独り言、口に金の舌をなめてぞ出でにける」(『曾我会稽山』)。「此物前にはすくなくも舌五枚(金五両をいふ)は呉やうと思ひの外」(『大千世界楽屋探』下)。

*15

此顎のきざ／＼が塩かぶれなり あごのまわりがぐるりとかぶれている、の意か。「俚言に塩をなめて金を溜める」(『絵本江戸風俗往来』「塩や」の項)といい、それを踏まえるか。「鹽嘗指 第二指〇又人さし指と云」(『俚言集覧』)。「大江山さゞめのやうなあごばかり」(『万句合』宝一三礼二)。

*16

椎の実は手足の爪 「椎爪」は椎の実のように縦に筋が通って丸く縮んだ爪。「手を出して椎爪さもし田舎娘」(『冠独歩

行』、「爪は椎^{ヒツメ}爪^{つめ}が吉銅^{よしかがね} 爪は半吉なり」(『譬喩尽』三)。

*17 虎の皮の褌 鬼や雷神などが締めているという虎の皮で作ったふんどし。

*18 ……といった と言うのは。と言うわけは。「さて行法の次第といっば絹もつむぎも着ることならず」(『博多小女郎波枕』長者経)。

【挿絵】右図は朝比奈と化地蔵が、煩惱にとりつかれた人の心の鬼をみてるところ。左は、心の鬼によって人間が化けた姿を宝珠から映し出している。

(岡島)

12、(九ウー〇オ)

△こゝに皆様御存^{みなさま ゼン}じの^{むかし}昔八丈といへる上り本の中にあらはれたる²白木屋の³番頭丈八は、⁴団七首の敵役にて、⁵主人庄兵衛の家を横領^{いへ}に婿^{むこ}にならんと、⁶手代薦^{てび}八といっしか心を合^{あは}せ、⁷兩人、⁸一つ穴の狐と口にはいへど、⁹よもや顔かたちまでが狐にならふとは思はず。これを天道様神仏様の目から御覧^みじると、此絵^{みづえ}の如^{ごと}し。善人^{ぜん}の真似^{まね}をすれば、¹⁰則ち善人、悪人の真似^{まね}をすればこれ悪人、畜生の真似^{まね}をするものはやはり畜生なり。此世^よにて犬猫^{いぬねこ}を酷^{ひど}くするものは、¹¹未来^{みらい}畜生道^{ちくしやうだう}へ墮^おちるといへど、それより手短^{てみじか}なこの世^よにて、¹²悪心を企^{たく}むもの此世^よから畜

生道^{しやうだう}へ墮^おちて、¹³一ツ穴^{いっつあな}の狐^{きつね}となる。慎^{つし}むべし恐^{おそ}るべし。

(狐) へアノ為替¹¹金の五十両をこつちへせしめ漆^{うるし}としやうか、¹⁴どうで句^くひが鼻^{はな}へついて¹⁵塙^{はた}へられぬは、¹⁶鼻筋^{はなすじもと}元からふか／＼ときてある。

(狐) へ我^{われ}は化^わけたと思^{おも}へども、¹⁷徳^{はく}にあらはれしか、コン面目^{めんぼく}ない。

(朝比奈) へなるほど地蔵^{じざう}さんの談義^{だんぎ}は嘘^{うそ}ではないわへ、おそろ

一ツ穴のきつね

*18 諸国書状挿／＼ *19 判取帳

【語釈】

*1 昔八丈 松貫四・吉田角丸合作『恋娘昔八丈』五段。安永四年(一七七五)江戸外記座初演。お駒才三郎の情話。

*2 白木屋 浄瑠璃では城木屋。「人の思わくしんだいもかたいしやうばい城木屋と門に、印の杉ならでのきに、ならぶるさいもくはいくとしふりし仕にせ也」(『恋娘昔八丈』城木屋)。

*3 番頭丈八 「見せをあづかる丈八がもたれかゝった帳箱に、もつたい付るばんたう顔」(『恋娘昔八丈』)。

*4 団七首の敵役 大団七。人形浄瑠璃のかしらの一つ。遣い手が糸を引くと立つ「立ち眉」の仕掛けがある他、寄り目と口

の開閉ができる。時代物の荒立役に用いる。『国性爺合戦』の和藤内のかしらであつたが『夏祭浪花鑑』の団七九郎兵衛に転用したことから名称。

*5

主人庄兵衛の家を横領して婿にならん 『恋娘昔八丈』では、

主人庄兵衛は目の病にかかっている。番頭の丈八は、城木屋の娘お駒に横恋慕して、お駒の婿の喜蔵を毒殺しようと考え

*6

手代 蔦八 浄瑠璃の『恋娘昔八丈』には登場しない名。歌舞

伎での役名かと考えられるが、寛政以前の番付にはすぐには見あたらない。番頭「丈八」の名は「八丈」の転倒となっているが、「大引出の錠明けて箆箭をひらりと蔦八丈。京縮緬の」(『心中天網島』)などというように「蔦八丈」(蔦色地の八丈絹)の連想からの馬琴の創作か。

*7

一つ穴の狐 「一つ穴の貉」に同じ。「遣手まで一つ穴の狐では、示しがきかぬゆへ」(『玉磨青砥銭』)。

*8

畜生道 仏語。悪業の報いで畜生に生まれ変わって苦しみを受けるという世界。「君は閻王の寵を請、我は又はかくも畜生道に落行ば、相見る事もなりがたし」(『根無草』前・五)。「忠孝全き竹杖にて、煩惱の犬を打、畜生道をまぬかれて、天堂に生るるかたち」(『昔話稲妻表紙』五・一六)。

12、
(九ウ一〇才)



*9 手短な てつとりばやさ。 「むかしむかしの桃太郎は、鬼

が島へ渡り、もて入らずに多くの宝を取て来たげな。これ
ほど手みじかな仕事はない」(『鹿の子餅』桃太郎)。

*10 悪心 悪事をしようとする心。 「その悪心虎狼に勝れり」(『椿
説弓張月』拾遺・五六回)。

*11 為替金の五十両 浄瑠璃の『恋娘昔八丈』には五十両の為替
金横領の件はない。 「身が方へ上った江戸為替の五十両は何と
して届けぬ」(『冥途の飛脚』)。「この親仁はおれが持つて居
る為替金の三百両を盗まうとしたのだ」(『浮世柄比翼稲妻』
二幕)。

*12 せしめ漆としやう 切つて水にひたしておいた漆の木の枝か
らかき取った漆汁のこと。 「せしめる」にかけて、うまく手
に入れる意に用いた。 「涙を袖にのごひ漆とぬりかへしまつさ
きかけて、一ばんくびをせしめ漆といきみをなし」(『百合若
大臣野守鏡』一)。

*13 どうで どのようにしても。 「年寄った二人の親たち、どうで
こな様のみんな世話」(『仮名手本忠臣蔵』六)。「どっちでも
いい、どうで一緒に帰る者だ」(『浮世風呂』二・上)。

*14 匂ひが鼻へついて 匂いが鼻を刺激する。
*15 堪へられぬ たまらなくよい。 「エエ、畜生めエ。新内だナ。

こてへられねへ」(『浮世風呂』四・下)。

*16 鼻筋元からふか／＼と 匂いが鼻を刺激する様子を指すか。
「首筋元」「ふか／＼」は『恋娘八丈』に見える。「目には涙
の玉あられ、我身にうけて丈八が、くびすじもとからじいは
じは、じは／＼／＼、これ迄もいく度か、もらいはふか
／＼と、口迄はぞろ／＼出たけれど、云出しかねておりまし
た」(『恋娘昔八丈』城木屋)。

*17 穂にあらはれしか、コン面目ない 「穂にあらわれる」は人目
につくようになること。「コン面目ない」は狐の鳴き声と「本
(に) 面目ない」を掛ける。「ハ、我はつゝむと思へ共、ほに
あらはれしか、コレハシタリめんぼくない」(『恋娘昔八丈』
城木屋)。

*18 諸国書状挿 諸国からの書状を入れる状差し。「書状さしを
柱かくしとおぼへてかけ置く」(『此奴和日本』)。

*19 判取帳 金品を授受した証印を受ける帳簿。「客へみせる判取
帳を出す」(『玉之帳』三)。

【挿絵】狐になった丈八と鳶八の様子を外から朝比奈が覗いている。
帳箱には開いた大福帳が置かれ、右の柱には「諸国書状挿」と「判
取帳」が懸かる。算盤、煙草盆がある。左手にあるのは狐釣りの罟。
鳴子が仕掛けられており、袋の中に五十両があると思われる。その

匂いに釣られて丈八が手を伸ばそうと近付いている。『世上洒落見絵図』六才に同様の異が見える(但し鳴子はない)。『世上洒落見絵図』は、狐と狩人の立場が逆転して、狐が狩人を二百文の餌で釣ろうとする場面で、ここの丈八と鳶八の場面に似る。(大屋)

13、(二〇ウ)

さて丈八は五十両の金を取り、俄に懐が温まりければ、その夜、大磯の、戯れ女を買はんと鳶八と二人にてさぐめき合ふて行けるが折悪しく、その夜の相方来たらざりければ、隣の話に寝つかれず、廊下の足音にもしやそれかと俄に、狸寝入りをすると、丈八が顔狸と見ゆる。これを思へば狐狸は、一ツ種のものに見へたり。

狸眠り
たぬきねふ

(狸) へ狸寝入りも古いやつだ。エ、畜生めと言つては俺がこ
とらしい

へ月待ち日待ち待ちぼうけ、狸に眠る。法印さんだ。

【語釈】

*1 大磯 鎌倉の相模湾に面する地。「鎌倉の御代の時節は、大磯

13、(二〇ウ)



*2 に廓ありてその繁昌いふばかりなし」(『高漫斎行脚日記』中)。

戯れ女 ここでは遊女のこと。「たはれ女も、みたりまでここ
にきたりて、酒くみかはしはべりしに」(『旅眼石』)。

*3 相方 敵娼。遊客の相手となる遊女。「ハア此監物は義岑が相
方、台と申す女郎をたらし込まんと」(『神霊矢口渡』一)。

*4 狸寝入り 狸は強く驚くと死んだふりをするところから、空
寝をすること。「こふ待せるはどふした訳とむつとしてある夜
着の内、漸で来てゆり起せど、狸寝入の高いびき」(『恋娘

昔八丈』初段)。

*5

一ツ種 共通の源を持つこと。「人間及び衆生も仏も本来
一種より起て、皆ことごとく化物なり」(『春色恋白波』二
・三回)。

*6

月待ち日待ち 人々が集まって念仏をしたり、酒宴や遊興を
楽しみながら、月の出・日の出を待って拝む行事。「かる口た
たき町の芸者といはれて月待日まちに物まねして人の氣に入
ける」『世間胸算用』三・二。「月待ち日待ち臺まちや田町に
ござる法印さんの守りお札や占やさんよくあひ性も木性も火
性。吸付け煙草の火皿さへ。鉄砲店の氣散じは。短き夜半を
きりどす枕も床もうは草履。浮氣同士の仇比べ…」(常磐
津『戻駕色相肩』に拠る)。

*7

狸に眠る 狸寝入りをする。「起きなんしなど、狸へ寄りかゝ
り」(『柳多留』拾遺)。「田町にござる法印さん」(常磐津『戻
駕色相肩』のもじり(*6参照)。

*8

法印 法印大和尚位の略だが、山伏の俗称。加持祈祷や占い
を行う。「法印さんを頼んで八卦を置いたり、待人をしたりし
ゐしたものを」(『甲斐新話』。「月待ちく法印さん」まで『戻
駕色相肩』のもじりだが、狸姿の丈八が遊女を待ちくたびれ
て狸寝入りをしているのを、ここでは月待ち日待ちの行事で
招いた法印が待ちくたびれて居眠りをする意と掛ける)。

【挿絵】夜着の中で待ちくたびれた狸姿の丈八が狸寝入りをしてい
る。行灯、火鉢、箱枕、鉄瓶の他、奥に屏風が見える。(大屋)

14、(一一オ)

丈八余りに待ちぼうけ、うそく廊下を見まはせば、脇からあの
人は廊下ださうだと言へば、たちまち丈八が姿と見へる。
こゝに如何なる因縁にや空き座敷の隅にて頭の黒き鼠出て、
残り肴を喰ひ荒してゐる。これも飲みたひ喰いたひの心の鬼が
頭の黒き鼠となりて畜生道へ墜ちたるものと見へたり。恐
るべし。

頭の黒い鼠

夏の毛虫は蝶となるは天性なり。これはおのが心の鬼に責
められ鷹となり鼠となる。慎むべきはたゞ心なり。

【語釈】

*1 うそく 落ち着かない態度で、見回したりする様子。きよ
ろきよろ。『祐成やおはする、時宗やまします』と小声に呼
ぶで、うそくそと尋ね廻るは(『百日曾我』三)。

*2 廊下 遊女が来るのを待ちわびて遊客が廊下をうろつき回
ったりすること。「松さん廊下ををしなんすなへ」と(『繁千
話』)。



* 3

頭の黒き鼠

家の中の物が紛失したりした時などに、誰かが盗んだのだろうと鼠に装えていう表現。「あたまの黒ひねづみの業、是からは油断のならぬ事と」『世間胸算用』一・四。

「頭の黒い鼠は、海驢といふ獸にて、昼は居眠りばかりなし、夜になると目を皿の如くにして現るゝ。卓袱などを搔探し、鯉の骨なぞをしやぶり、いろ／＼食物を荒らす」『化物和本草』。

* 4 天性 生まれつき。天資。

【挿絵】心の鬼次第で、鳶にも鼠にもなるということを示す場面。

廊下鳶をしていて鳶の姿に変わった丈八（本文には丈八とあるが、絵では12（九ウ一〇才）の鳶八の衣裳。ただ狐ではなく鳶の顔になっている）が、頭の黒い雌雄の鼠二疋（右は振袖姿）が残り物を食い荒らす様子を覗いている。（大屋）

15、(二ウ二才)

かの頭の黒き鼠は、硯蓋を食ひ、手水を遣つてゐる所を、遣手婆にみつけれられ、大きに油をとらるゝをみれば、真綿で首をしめるごとく、はじめは猫で声で痛めつけるゆへ、この婆が顔も猫に見へるなり。これらの輩は、夜寝ずに暮らすゆへにか、猫となり、鼠となること、何の因縁共知れず。作者が知らねば誰も知り手はなし。此鼠、猫で声、大の禁物にて一口噛みつけられると命もとらるゝほどに、みな／＼ちうの音も出ず、一トかたまりに縮みある。

ねこなで(二)

(猫)へおまへ方はにやんのことだ。座敷の残り物を食つて遊んでゐると誰が言ひつけた。大方、此中筆箭の引出しを噛つたも頭の黒い鼠だろうと決めつける。

(鼠) へ又¹⁷厭味^{いみ}金山^{みんさん}で絞^しめられた。

(狐) へ二人^{しよ}一緒に寄つた所はいつでも^{あな}一ツ穴^{きつね}の狐なり。

【語釈】

* 1 頭の黒き鼠 14 (二一才) 注参照。

* 2 硯蓋 口取肴などを盛る広蓋。ここではその肴。「箸もつて肴にまよふずぶりぶた」(『柳多留』六)。

* 3 手水を遣 水・湯で顔を洗う。「湯へ行くがいやなら、手水を遣ふがいゝヨ」(『水縁奇遇都の花』下)。

* 4 遣手婆 妓楼で諸事の取り持ちや遊女の指導などをする女。「やりてばば女郎のはてと思はれず」(『柳多留』六〇)。

* 5 油をとらるゝ 過ちを責められる、懲らしめること。「今日はしたたか、油をとられるとみへる。なんときめられても、一言もない」(『文武二道万石通』下)。「膏取らしやんな」(『譬喩尽』)。時代は下るが『独道中五十三駅』でも化猫が油行灯の油を舐める場面があるように、猫の縁で用いる。

* 6 真綿で首をしめる 遠回しにじわじわと責めること。「さながらまわたにてくびしめらるる思ひ」(『傾城酒吞童子』三)。

* 7 猫なで声 媚びるようにやわらかな声。「猫撫声で」(『譬喩尽』三)。「猫撫での姑時目が変わり」(『柳多留』七一)。

* 8 痛めつける 責め苦しめる。いじめる。

15、(二一ウ二才)



*9 夜寝ずに暮らすゆへにか、猫となり、鼠となる 猫も鼠も夜

行性。また私娼を猫とも呼び（「寝子」からとも）、鼠は、人が寝た後に出て物を盗むところから寝盗の義（『和訓栞』）もある。

*10 何の因縁 十二因縁のことか。10（七ウ八オ）注参照。

*11 大の禁物 最も避けなければならないもの。非常にいやなもの。「我れらには大禁物、見付られてはめいわく」（『鑑の権三重帷子』上）。

*12 ちうの音も出ず 「ぐうの音も出ず」をもじったもの。「ちう」

は鼠の鳴き声を表わす。「かの日月の恩を忘れ、迷ひの雲に覆はれまいぞ。日に鳥の反哺の孝あり、月に兎の大手柄あり。

月日の鼠、ちうと鳴けば万代の亀、孝に止まる」（『実語教幼稚講釈』）。

*13 にやんのことだ 「なんのことだ」をかけたもの。「にやん」

は、猫の鳴き声を表わす語。「天井を鼠のあれければ…鼻をつまんで、にやんといふた」（『宇喜藏主古今咄揃』一・一）。

*14 誰が 「だが」、「だれが」の「れ」が脱落したもの。『だが

（誰）かな棒ひいた』『誰でもサ』『辰巳婦言』宵立の部。

*15 大方 恐らく。きつと。「おふかたその人だもしれねへ」（『孔子縞于時藍染』下）。

*16 此中 この頃。「しからば奥様へ申てくりやれ、此中は御ぶさ

た、お留主何事なく珍重に存まする」（『鑑の権三重帷子』上）。

*17 厭味金山 厭味の洒落。厭味銀山。石見銀山のもじり。「雖里さん、又いやみ金山か、久しいものよ」（『松登妓話』二）。

*18 絞める きびしく責めなじる。「ちとしめてくりやうと親仁ねずに居る」（『柳多留』六）。

*19 一ツ穴の狐 12（九ウ一〇オ）注参照。

【挿絵】右手、狐姿の鳶人と丈八の前にいるのが、煙管を片手に持った猫の遣手婆。左は頭の黒い鼠となった遊女。右のは黒地に大きな菊菱柄で流れ菊の文様、左の鼠は麻の葉文と笹に梅文様。（岡島）

16、（二ニウ一三オ）

*1 悪事千里を走る事虎の子のごとく、*2 好事門を出ざること、

鰻鼠に似たりとは、宜なるかな。白木屋の丈八、手代鳶八はい

ろ／＼の悪事をたくみ、その上五十両の金を遣ひし、尻尾をあるじ庄兵衛に見つけられ、遂に、化の皮を剥がれ、丸裸にされて追

出さるゝ。うはべは化けたと思へども、遂には、尻尾を出すこと、

これ、天道の責といふべし。おそるべし。

（庄兵衛）「この尻尾を見つけやうと大抵心をつけたことではない。此化の皮が世にいふすつぽの皮であらう。てんと狐の尻尾

ときて、ふさ／＼しい。

(狐) へおいらは本の^{ほん}人の屑^{くず}の葉^は、信太^{しんた}の森^{もり}ではなくて、しまつたのもりだ。

(丁稚) へ¹⁶でつちいのすけ、追^おい出す

(丁稚) へ¹⁷人面^{めんじょう}獣^{じゅう}心の¹⁸獅子^{しし}身^{しん}中の¹⁹虫^{むし}けら、コ、ナ畜²⁰生^{しやう}め

(狐) へサア²¹仕舞^{しまひ}をつけた、こん²²と言^いつても、くわい
くとないても、こんくわい先に^{さき}立^たうずだ

(狐) へヲ、寒^{さむ}い

【語釈】

*1 悪事千里を走る事虎の子のごとく 「悪事千里を走る」と「千

里の野辺に虎の子を放つがごとし」を続けた。前者は悪い行いはすぐに世間に知れ渡ること。後者は害を及ぼすものを野放しにしておいて、後の災いを残すこと。「まことに悪事千里万太郎が仕業誰いふ共なく所にさたして」(『本朝二十不孝』四・三)。「頼朝を東国へ流し遣はしけるは…千里の野に虎を放ちたるが如し」(『源平盛衰記』一七・大場早馬事)。

*2 好事門を出ざる 「好事門を出ず」は良い行いは世間に伝わりにくいこと。「かうじ門を出でずとあり、これは門外なり」

(『醒睡笑』八)。

*3 鼯鼠 土龍とも。もぐらのこと。「もぐらもちをみるやふにと、あつちへころころ、こつちへころころしているはへ」(『客衆

16、(二二ウ一三才)



肝照子』。

*4 むべなるかな 宜(うべ)なるかな。もつともなことだなあ。

いかにもそのとおりだなあ。むべなるかな。

*5 尻尾 隠し事などのぼろを出すということ。「其糟を舗ひ其錢をせしめんと思ひ付きしを早くも卯雲木室君に尻尾を見出され」『風来六部集』放屁論追加。

*6 化の皮をはがれ 正体が現われる。「ばけのかはがはげかかるでやけと出てびこつくか」『蘆屋道満大内鑑』三)。

*7 丸裸 家財などが何もない状態。「諸道具迄も煙となし皆々丸裸になりしが」『日本永代蔵』四・三)。

*8 尻尾を出す 本性が露見すること。化けの皮がはがれる。「伯父と諸ともすござ」と、雨に瘦せたるぬれ狐、尻尾を出だせしあやまりより、肩身も狭き家の内」『人情廓の鶯』後・中)。
*9 天道の責 天道様、天が責めること。「或は父兄の道を違へ、或は主従の義を背く故に天の譴あるに非ずや」(流布版本『太平記』三七・可立大將事)。

*10 大抵心をつけたことではない ずいぶん注意した。よくよく注意したことは並一通りではない。「宵から大体おこしたこつちやない。もう七ツ半でもあろ」『遊子方言』更の体)。「己が心に負時は、万事に負て物の下と成て、うかぶ事あたはず。心に心を着て、強守べし」『万民徳用』四民・武士日用)。

*11 すっぱの皮 すっぱ。素破。盗人・詐欺師のこと。「いや盗人のすっぱのと云ちらされてきよろりつとうぢついている人じゃない」『八百屋お七』上)。

*12 てんと まったく。「てんとお痛はしや／＼」『桃太郎発端話説』。

*13 ふさふさしい。 ふさぶさしい。ふてぶてしい。図々しい。「穴を掘るのほらねエのと、水場の施主か、掘抜井戸の地主が、聞いてあきれたア。ふさぶさしひ」『辰巳婦言』四つ明の部)。また狐の尻尾が「ふさふさ(総総・房房)」している様子を掛ける。

*14 人の屑の葉 「人の屑」と「葛の葉」を掛ける。葛の葉は『蘆屋道満大内鑑』で知られる安倍晴明の母狐のこと。

*15 信太の森 人間の葛の葉は信太の庄司の娘。「信太」と「しまった」(失敗した) 意を掛ける。「なむさんしまった」『めくら仙人目明仙人』。

*16 丁稚猪之助 浄瑠璃『恋娘昔八丈』には見えない。歌舞伎では登場するか。寛政以前の番付にはすぐには見当たらない。狐を追いつ出すので、狐より強い猪を出したか。明和八年市村座「和田酒宴納三組」で「十郎とちよきの猪之助三五郎、早替り大評判」『花江都歌舞妓年代記』、朝比奈関係の芝居由来の名とも考えられる。

*17

人面獸心 恩義を知らない人。顔は人間でも心は獸に等しい

ことからだが、ここでは獸面の造型で獸心であることを示す。

「恩を知らねば人面獸心といふてな。顔は人でも心は畜生」(『菅

原伝授手習鑑』三)。

*18

獅子身中の虫けら 「獅子身中の虫獅子を食う」から。恩を

仇で返す者のこと。「獅子しんちうの虫とは儂が事。我君より

高知を戴き、莫大の御恩を着ながら、敵師直が犬と成て」(『仮

名手本忠臣蔵』七)。

*19

コ、ナ 「此処なる」から。ここでは罵つていう。「深き料簡

の有事もしらひで、ここの夜明けのぴんぞろめが」(『御存商

売物』中)。「はやく消えて失去りをれ、手間障とれば打殺し

て、獸店へ売つてやる。ここの畜生め」(『人情廓の鶯』後・

下)。

*20

畜生 他人をのしつていう。「エエ畜生め、モウちつとある

きやアがれ」(『道中粹語録』)。ここでは狐の姿をしているこ

とを掛ける。

*21

仕舞をつけた 決着がついた。「下手な抜ひを入れて、しまひ

が附かずば、御自分の体はどう納め召さるる」(『毛拔』日本

古典全書所収)。

*22

こんくわい先に立ゝずだ 「後悔先に立たず」と狐の鳴き声

を掛けた。

【挿絵】材木商の城木屋の店先で立つているのは主庄兵衛(羽織に

「庄」で丈八の着物を持つている。この着物から尻尾が出ている

のは「化けの皮」という意味であろう。庄兵衛の奥に帳箱が見え、

その先には材木が立てかけられたり、平積みにされている(一例と

して『当世織續紛八丈』にも同様の材木屋の城木屋の店先が描かれる)。

逃げ出す狐二匹は襦袢と褌姿で、尻尾だけが描かれない。(大屋)

17、(二三ウ一四オ)

凡そ草双紙の化物は、金平弁慶に、茶屋を畳まるゝは御子様方

御存知のこと故、朝比奈一番工夫を替へかの地藏様御談義をき

つと守りて物の命を断つことをせずして化物を平らぐる、その

仕方をよく案じたり。それはどうだと言へば、先年、市村家橋に我

が名と心を貸したるとき、覚へたる拍子を、ちりから入たる、浮か

れ朝比奈大薩摩。或は長唄の出立にて、一番はねを取れば、

化け仲間も感心してゐるところを、ちよいとさして押つ取とつた

り。又はそれぐの得手物に、かんまへて此草紙の化け手合を残

らず生捕りにしつ。¹¹したがどう、¹²仕舞をつけることか、こゝでは

マア知れず、定めて此次を開けたら分かることだらうと、皆々、¹³

二番目を見たがる位、¹⁴此場は大出来大当たり、一ツしめましや

う、しやんく。

(化物達)へ此仕舞がどうなることやら、麴町の代物にならね

ば良いが。いつそ見世物師が手に渡つたら一番銭儲けをしてやらうと化物ども案じめる。

(鼠) 鼠は柵の中なれば、何を言ふか聞こへず。

(河童) へ、かつばと伏て泣きゐたるはあんまり手がねへの

(鷺) へいつそ、矮鶏ならかうした憂目は見まい。

(鳶) へア、こんな目に遭をふと知つたら、紙鳶か風の股ぐらにしやがんでゐれば良かった

【語釈】

*1 金平弁慶 どちらも怪力剛勇の武者。金平は金平浄瑠璃の主人

公。源頼光の四天王の一人である坂田金時の子。弁慶は義経

の従臣として名高い。「てんつくてんつくでこのぼう、べんけ

いやきんぴらが、ゑいやつととゑいやなどときり合を見せま

せふ」『丹波与作待夜の小室節』上。

*2 楽屋を畳まるゝ ここでは芝居が終わるの意。

*3 市村家橘に我が名と心を貸したる時

市村家橘は九代目市村羽左衛門。ここでは宝暦七年二月の市

村座「染手綱初午曾我」で初代市村亀蔵として朝比奈を演じ

た時のことを指す。「四五年いぜん春狂言に、鳥さしの朝ひな

を勤られしが大評判」(宝暦十一年『役者初白粉』市村亀蔵評)。

また鳥さしの朝比奈は安永二年の市村座「江戸春名所曾我」

17、(二三ウ一四オ)



で松助も演じる。「松助・二やく朝比奈にて鳥さしの出評判よし」(『花江都歌舞妓年代記』)。

*4 ちりから 二挺鼓を打つこと。その囃子。「公などは本にきやうが通だから、唄を習ふよりちりからにすればいい」(『志羅川夜船』素見高慢)。「三味線 西川億蔵 小つゞみ宇野長七 同弥之助」(『うかれあさひな上るりかけあひせりふいり』)。

*5 浮かれ朝比奈大薩摩。或は長唄の出立 「そがの十郎朝ひな二やく、鳥さしの所作、亀蔵」(『花江都歌舞妓年代記』宝暦一年)。「絵馬の内より出し一人の朝比奈ハ：：亀蔵の朝比奈。薩摩太夫の浄るりに合ハせ、鳥さしの所作」(『歌舞伎年表』宝暦一年)。「うかれあさひな 上るりかけあひせりふいり」(『染手綱初午曾我』第一番目／『鳥さし浮流朝比奈』抱谷文庫蔵)には「上るり薩摩小源太夫」とある。

*6 一番 いっぺん。「二ばんはじをかくとおもつてやつてのけやしよう」(『廻覧奇談深淵情』)。

*7 はねをとる 大当たりをとる。評判を上げる。「おらが中間でも、どふぞはねを取たいものだ」(『楽牽頭』御寵愛)。

*8 ちよいとさしておつとつたり 挿絵のように、棒を差して、勢いよく取る、ということ。

*9 得手物 最も得意とするわざ。十八番。「めうじが三浦だから、漁は多てものだ」(『文武二道万石通』中)。「化物屋敷はおら

が得手物だ。幽霊でも出やがったらば、ぶち殺してすましの吸物にして一盃のむ」(『説話仕形嘶口拍子』)。

*10 かんまへて 「構えて」。必ず。「京のおぎんが隠れ家と、かんまいてたづねて下さんせ」(『色道懺悔男』)。

*11 したが しかし。「したが女郎といふものは」(『傾城買四十八手』)。

*12 仕舞をつける 16 (二二ウ一三才) 注参照。「いかにもあいつをしまひつけ身共が所持する竜虎の呼子を売払ひ」(『五大力恋緘』)。

*13 二番目 二番目狂言。歌舞伎で一興行に演ずる二番目の世話狂言。「顔みせの二番目はいつも雪降で高麗屋の親仁が例の洒落」(『浮世床』初・上)。

*14 一ツしめましよう 結着を祝つて掛け声とともに一斉に手を打つ。「サ、丸くなつたらお互に一つめませふ」『アアよいよいよい』アアよいよい』ト手を打つ」(『お染久松色読販』序幕)。

*15 麴町の代物 すぐ南に平行する平河町で、鹿・猪等の肉を食わせるももんじい屋が著名。「おつかない立売をする麴町」(『柳多留』六)。「勘平は麴町へも折々出」(『柳多留』拾遺九)。「ももんじい」は獣の称だが、妖怪、化物の意もある。「その子が夜泣をする」と女房があれ／＼ももんじいが来たよ／＼とおど

しかけるに」(『遊子学珍学問』。「早く寝^ねしな。ももんじいが来るよ」(『浮世風呂』二上)。ここでは化物らが捕らえられて、果てはももんじい屋で食べられてしまうのではと恐れている。

*16 一番 こころみに一度。「こつちも一番いうた跡は、モウいざこざはないわいの」(『妹背山婦女庭訓』四)。

*17 かつばと 勢いよく急に倒れ伏すさま。がば。どう。「いまはかうとおぼえける時、かばとおき、舟のへたにたつて奥の方をにらまへ」(『平家物語』五・文覚被流)。「河童」を掛ける。

*18 手がねへ 平凡でつまらない。「絵を出した計りでは、疱瘡見舞のやうで、余り手の無い事でござりますね」(『八笑人』三上)。

*19 いっそ矮鶏なら 「いっそ野暮なら」の洒落。矮鶏は愛玩用に改良された日本特産種の鶏。「おれは前から矮^{チャボ}を飼ふが、ずんど手みじかに、起ちやつちゑと啼く」(『都鄙談語』矮)。

一番鶏・二番鶏を知るのにも使われた。

*20 紙鳶か風 「鳶」の字が、いかのぼりを指す「紙鳶」に含まれていることから、空に揚がる風の間に隠れていれば良かった、というほどの意味。「鳥賊」と「蛸」を掛ける。

【挿絵】折編笠を被った朝比奈が足下に河童を踏みしめ、竊竿で鳶

姿の丈八を捕らえようとしている。右手には青鳶が籠に、盆の上の鼠が柵に捕らえられている。左手の猫(小判柄の振袖)、狸、狐はそれぞれ首に縄を掛けられて、朝比奈の腰に結わえられている。狐は帽子を被っているが、狐の嫁入りの連想か。(大屋)

18、(一四ウ一五オ)

・細工は流々仕上げを見ろで、朝比奈はどうすることかと思ひし生け捕りの¹²化組のうち、丈八鳶八兩人を雲居遙かに連れきたりて、何かまん丸に光る恐ろしき方の前に引据ゆるに、丈八鳶八はおのが悪事に身を責められ、泊り定めぬ¹³風吹鳥の名をとり、¹⁴寒の冬も着物一点にて、おのが名の¹⁵昼鳶八となり、¹⁶味噌漉しの¹⁷油揚をさらはんとして、¹⁸性なき¹⁹餌差の²⁰鳥糞にあへなく命を失はんことを、朝比奈が慈悲の²¹竿に刺されて此所へ連れられ、天道様の明らかなる御意見を詳しくなされて元の人間にかへし給ふぞ、ありがたき。又此他の化物の生け捕りは地に住むもの共なれば、かの地藏様へ頼みて²²済度させける。

其場も見たいものなれど、紙数がこれきりなれば書れず。大方地藏様の御意見で皆々心を改めつらん。これ朝比奈が慈悲善根の²³新板かわつた化物退治なり。

(朝比奈) へ朝比奈は²⁴天帝の前でも²⁵大胡坐をかいてゐるが、これは御覧の如くなる²⁶太つてうなればお許しさ。

風吹鳥

(丈八・鳶八) へだん／＼の御意見^{ごいけん}あやまり入ました。誠に
今の¹⁹阿呆鳥^{あほうがす}、²⁰鳶^{とんび}とろ／＼のもめる種^{たね}、この世から畜^{ちく}生道^{しやうどう}へ落^お
ちました。向²¹後心を改めしやう。

(天帝) へ世の中に化物／＼と恐ろしがれど、²²たかで化物は
狐^{きつね}狸^りじや。そちたちがやうに悪しく心を持てば、これ人間の
化物にて狐となり狸となり鳶となり鳥となる。²⁴鳥は親に
反哺^{はんぽ}の孝^{かう}を尽くし、²⁵鳶は日和^{ひより}を人に語る。人間の風吹き鳥は
かへつて鳥の鳥には劣つたものじや。こゝをよく合点^{がてん}して心
の鬼^{おに}を心で責め^せ真^{まこと}の人間に立ち返りやれ。合点^{がてん}か。
(天帝) へ天道人殺さつ。こんな世話^{せは}をするがわしが役^{やく}じや。

【語釈】

- * 1 細工は流々仕上げを見る 出来上りを見てから批評せよの意。
「なんと、細工はりうりう仕上げを御覧じされたか」『毛拔』。
- * 2 化組 化物仲間、の意。
- * 3 風吹鳥 吹けば飛ぶような奴、意気地なし。「風ふき鳥のやう
足のひよろつくなどを云…」『諺苑』。「アレ／＼、向ふ
へ風吹鳥、客めらがくるは／＼」(『助六由縁江戸桜』)。
- * 4 寒の冬 冬の小寒・大寒の総称。
- * 5 鳶八 鳶八の名に「鳶鳶」を掛けた。鳶鳶は、昼間、通り

18、
(二四ウ一五才)



がかりに店先の金品をかつさらう盗人。「旅に在つては護摩の灰、市に出ては昼鷲」(『占夢南柯後記』六)。

*6 味噌漉し 味噌をこす道具。「味噌こしを持つて豆腐を買ひにいつたり」(『浮世風呂』二下)。

*7 油揚げをさらはん 諺の「鷲に油揚げをさらわれる」から。「十二三の調市がちよろちよろと走て参りましたが、やがて鷲に油揚げをさらはれました」(『浮世風呂』四・上)。油揚げは俗に鷲や狐の好物という。「阿呆烏と笑われ、味噌漉しの油揚げをさらひて、昼鷲と憎まるゝ」(『買貽昏風野弄話』)。

*8 性なき 思慮がない。慎みがない。

*9 餌差 小鳥を鷲竿で刺し捕えること。また、それを業とする人。「小さい内から餌刺が好きで」(『浮世床』二・下)。

*10 鳥鷲 小鳥などを捕えるために竿などの先に付けて使うもので、粘着力がある。モチノキ、クロガネモチ、ヤマグルマなどの樹皮からとる。「べつたりと・とり餅でぬる鴨の疵」(『田みの笠』)。

*11 竿に刺ゝれて 鳥鷲の竿と、物事が思うままに進む意の諺「流れに竿刺す」を掛けた。「内状を通じて、事の由を知せたりければ、流れに棹と悦て、聽て同心してげり」(『太平記』三一・新田起義兵事)。

*12 濟度 仏語。衆生を悟りの境地に導くこと。「浦嶋屋太郎介は

狂言和尚の方便に濟度せられ、未長く榮へける」(『四遍摺心学草紙』)。

*13 新板かわつた 正月に一枚絵や草双紙、宝船の絵を売り歩く際の呼び声。例えば「新板かわりました道中双六」。「富士之白酒 安部川紙子 新板替道中助六」。「しんばんかわりましたおしゅこうく」(『無益委記』)。

*14 天帝 造化の神。「そもく天上に天帝と申すとうとき神おわしまして」(『心学早染草』)。

*15 大胡坐 無遠慮に足を広げて組んだあぐら。「おれが此肥満して、大胡床かいて居るを、終に不礼なとて、咎もせず」(『教訓雑長持』五・福神の教を受けて金持と成りし事)。

*16 太つてう 「ふとつちよ」に同じ。肥大漢。多く長呼して「ふとつちよう」という。「からかさでさへ大こくはふとツてう」(『柳多留』九)。

*17 だんくゝの 次から次へ続く様子。「だんだんの物語をする」(『高漫齊行脚日記』下)。

*18 あやまり入りました 恐れ入る。「大極上々無類とび切のぜん人となるぞありかたき。だんくゝあやまりいりました」(『四遍摺心学草紙』)。「たしかにあやまりいりました」(『電將軍勘略之巻』)。

*19 阿呆鳥 その鳴き声から鳥を罵つて言う語。愚かな者にたと

えて言い、ここでは丈八（ここでは鳥に描かれる）や鳶八のこと。「阿房鳥のカアカアと黄昏に我家へ帰らず」（『禁現大福帳』一）。

*20

鳶とろゝ 「とろろ」は鳶の鳴き声を指す。物をさらわれることをいう。「是でいかずはあぶらげか、むね上の餅よりほかに案じはなひ。とんびとろゝのもめるたねだ」（『荒山水天狗鼻祖』）。

*21

向後 「向後おん家の奴僕ともおぼされて」（『昔話稲妻表紙』五・一七）。

*22

たかで たかが。「たかで相手は、野乞食と言上てある夜たかでごぜへす。サアかまわずと、早くお出なされやせ」（『卯地臭意』）。

*23

人間の化物 人間は化ける物、の意。「人ははけもの、世にない物はなし」（『西鶴諸国はなし』序）。「よるべなき素浪人と、悪性のつもる出家とは、藪医者と化くる事すみやかなり。今の世には妖物こそいと多けれ。奸侯の賢者に化けたるは、世にも人にも害多し。彼に付き是につき、異体を好む人はみな／＼妖物といふべし」（『鶴巢反古枕』妖物ノ論）。「朝の豆腐屋は昨夜の油屋と変じて、ついに化物の油揚々と売歩く。人間の化けるを人間が見ては、糸瓜の皮とも思はねど、化物の方から見ては、これほど恐ろしひものなし」（『怪物徒然草』）。

*24

鳥は親に反哺の孝を尽くし 諺の「鳥に反哺の孝あり」に拠る。鳥獣さえも養育の恩に報いるということ。「鳥に反哺の孝あり」（『譬喩尽』二）。「また鳥に反哺の孝とて、鳥の内にても孝行の鳥と敬はれ」（『買飴帛風野弄話』）。

*25

鳶は日和を人に語る 鳶は天気を人に示す、の意。「鳶がまへば日和とす」（『諺草』）。「鳶は鳥には少し劣りて、よう／＼日和になるを告げるが鳶の役なり」（『買飴帛風野弄話』）。

*26

天道人殺さず 天の慈悲の広大なことをいった諺。「天道様は見通しにて、何もかも御存知なれども、心で済ませ給ふゆへ、天道人殺さずとぞ申上げる」（『天慶和句文』）。「天道様これらのものを一／＼療治し給ふ。まことに天道人ころさずとはよく言つたものなり」（『加古川本蔵綱目』）。

【挿絵】天道様の前に連れてこられた鳥姿の丈八と鳶姿の鳶八の衣装は以前とは異なっている。朝比奈は大胡坐をかきながら毛抜で髭を抜いている。（岡島）

19、（二五ウ）

さても小林の朝比奈は長々と地藏尊の教化を聞き、初めて世の中に本の化物はないといふことを悟り、人の心ほど恐ろしいものはなし。悟れば仏、迷へば凡夫、百鬼夜行は喜怒哀楽、

邪怪^{じやくけん}の角^{つの}は額^{ひたい}に生^はへ、我慢^{がまん}の天狗^{てんぐ}鼻^{はな}を伸^のばす。慎^{つし}むべし恐^{おそ}るべし、と思^{おも}へば忽^{たちま}ち初夢^{はつゆめ}の、富士^{ふじ}の裾^{すそ}とる素襖^{すわう}の袖^{そで}、翻^{くる}したる鶴^{つる}の丸^{まる}、鶴屋^{つるや}が見世^{みせ}の新板^{しんぱん}く。

(女) 迷^{まよ}へば狐^{きつね}

(朝比奈) 悟^{さと}れば仏^{ほとけ}

(女) 怒^{いか}れば鬼^{おに}

此女^{なん}何^{なん}の役^{やく}にも立^たねど、此草紙^{きそうし}あまり婦人^{ふじん}が払^ふ底^{てい}ゆへ、愛^{あい}嬌^{きやう}のための置人^{おき}形^{ぎやう}也。

曲亭馬琴作

【語釈】

*1 悟^{さと}れば仏^{ほとけ}、迷^{まよ}へば凡夫^{ぼんぷ} 「迷^{まよ}えば凡夫^{ぼんぷ}、悟^{さと}れば仏^{ほとけ}」。思い迷^{まよ}う

だけならば凡夫^{ぼんぷ}で一生^{いっしやう}終わるが、悟^{さと}りの境地^{きんぢ}に達^{たつ}すれば、誰^{たれ}もが仏^{ほとけ}になれるという意^い。

*2 百鬼夜行^{ひやくきやかう} 2 (一ウ二オ) 注参照。

*3 邪怪^{じやくけん}の角^{つの} 邪見^{じけん}で気性^{きせい}のかどだっていることを角^{つの}にたとえる。

「いとしひかはいひ子を殺^{ころ}さば、邪見^{じけん}の角^{つの}も折^おれふかと、かはいや万虎^{まんこ}にむだ死^しにさせた悲^{かな}しやな」『狩剣本地^{しゆけんほんぢ}』三。『邪見^{じけん}の角^{つの}文字^{もじ}折^おまげて』(天明六年「しばらくのつらね」『花江都歌舞妓年代記^{はなえのうたぎやうどき}』)。

*4 我慢^{がまん} 強情^{きやうじやう}。「おれが言^いつたことができねえによつて、言^いひわけなしの我慢^{がまん}だな」(『傾城買^{けいぢかひ}一筋道^{いっしんぢ}』)。

19、(一五ウ)



*5 天狗^{てんぐ} 4 (三ウ四オ) 注参照。天上^{てんじやう}や深山^{しんさん}に住^すむという妖怪^{やうかい}。

赤ら顔^{あかざわ}で鼻^{はな}の高い山伏^{さんぷく}姿^{すがた}と考え^{かんが}えられた。また高慢^{かうまん}でうぬぼれる人^{ひと}。「てんぐ、或^{ある}はのぼす、又^{また}くひん、又^{また}ぬう」『大坂繁花風土記^{おおくさはんかふうどき}』今世^{こんぜ}はやる詞遣^{しせん}ひ)。

*6 鼻^{はな}を伸^のばす 「鼻^{はな}を高くする」は自慢^{まぬ}する、得意^{とくい}になること。

*7 富士^{ふじ}の裾^{すそ}とる 「富士^{ふじ}の裾^{すそ}(野^の)」から「素袍^{すほう}の裾^{すそ}をとる」という意^いを繋^{つな}げた。新春^{しんしゆ}は曾我^{そが}狂言^{きやうげん}を上演^{じやうえん}するのが歌舞伎^{かぶき}の通^と。

例だが、富士の裾野の卷狩を舞台とする「曾我の対面」に朝比奈も登場する縁と、正月のめでたさの縁から富士を呼び出した。

* 8 鶴の丸 2 (一ウ二オ) 注参照。

* 9 迷へば狐 前述の「迷へば凡夫」を狐に替えた。化粧をして男をたぶらかすことから、女郎を罵って「狐」というが、ここで狐の面を持つのは遊女か。「江戸よし原のわか狐に、まよはぬ人あるへからず」「そぞろ物語」。「狸寐入りを狐来てゆり起し」(『柳多留』二九)。

【挿絵】中央の朝比奈は地藏の面を持つ。右手の遊女(振袖新造か。裾模様は桜)は狐の面、左手の留袖の女性(眉を剃る)は鬼の面を持つ(着物は松葉模様)。(大屋)

附 『安倍清兵衛一代八卦』翻刻と注釈(本誌四〇号掲載)訂正と補足

誤字脱字・表現の不正確な点、再考した点などについて以下に記す。

124・125頁11(一〇ウ)の補足にも示したが、全体にまず『安倍清兵衛一代八卦』の安倍清兵衛に平沢左内の面影がある。左内は、宝暦

頃「卜者平沢左内…等行はる」(『武江年表』宝暦年間記事)ときれ、花咲一男「易者 平沢左内」(『江戸あらかると』)に詳しい。

102頁*9 辻占 江戸の用例を挙げる。「しつかい客をおさきにしていろ男の辻うら」(『突当富魂短』)。

102頁*10 勤行 説明七行目、誤「二枚一門」、正「一枚一文」。

105頁【挿絵】 説明二行目、誤「菅笠」、正「塗笠」。

106頁*6 草双紙 正確には、ここではまだ合巻は登場していない。

106頁*9 注二行目、誤「掛ける」、正「もじる」。

108頁*7 豆炒り 「女と男と豆炒り」は、男女の子供が遊んでいると言われた唱句。「男女の児親しみ睦みて遊戯せるあれば、寓意の言を放つて曰く。男と女はまアめいり、いっても／＼いりきれない」(『日本児童遊戯集』)とある。

115頁*14 大木戸の牛 『江戸名所図会』高輪の牛町(車借の牛宿がある)には牛小屋が多いとあり「高輪牛町」の挿絵にも牛が描かれる。「大城戸の牡丹餅数を喰ねば、高輪の十八町も牛の小便とともに永し」(『南門鼠』)。牡丹との縁は、獣肉から牛を連想したと考えたが、牡丹花肖柏の縁か。牡丹花肖柏(夢庵)は「夢庵は常に牛に乗りて遊行ありし」(『醒睡笑』)とされる。

また後年の例だが、「猪のしゝの鍋やきくはす高輪に牡丹餅をもひさぐ大木戸」「肖柏が牛町つゞき大木戸に牡丹餅をもひさ

ぐ角店」(『狂歌江戸名所図会』八)。

116 頁*22 誤「やりくりしていている」、正「やりくりしている」。

119 頁*8 とげて… 米屋だけに「とげて」に「磨ぐ」をかけるか。

119 頁*11 誤『難波のは伊勢の白粉』正『難波の貞は伊勢の白粉』

120 頁*11 しのどう 単に禿の名前と注したが、「どう」は「どん」

の変化したもので、禿の名の下などへ付けていう。「これ、新助どう、今の光るものはなんだ」(『都鄙談話』二朱銀)。

120 頁*23 楊弓 誤「七間半…的」、正「七間…離れた的」。

124・125 頁11(一〇ウ) 清兵衛が蓋物の中を占わせられている場面

は平沢左内の伝に拠る。「平沢の占。両国橋米沢町に居る平沢左内は占道に妙を得箱のうちなる物をさすに紙の如し」(『江戸

塵拾』。「卜筮者に平沢左内と云もの出て是も世挙てもてはや

したり、今も市中の筮者の看板に平沢が号を出せるあり」(『賤

のをだ巻』)。予が少年の頃、平澤左内とて占筮の達人ありき。

予も先大人の側にて見しが、箱中に物を蔵して占はしめらるゝ

に其言中らざる無し」(『甲子夜話』五六)。「平沢の元祖と言

ハ狐の子」(『昔評宝十三・九』)。

126 頁*4 卯月八日 六行目「便所・台所へ張つて」は正確には「便

所・台所へ逆さに張つて」(『江戸生艶気権焼』にも描かれる。

126 頁*7 奴豆腐を「一丁の豆腐を十文字に四つ切」とする解釈は

『江戸語の辞典』に拠ったが、「豆腐を賽の目に切ったもの」(『川

柳食物事典』)とも。江戸時代の豆腐一丁は現在のものより大

きく(『生業物事典』『飲食史林』二・五号参照)。「仕出し

一) オイ、小半挺、八はいに切つてもらおう(豆助) オイ/

ト切つてやる」(『伊達曲輪入』)の例がちやうど、奴豆腐

ほどの大ききかと思われる。

126 頁*12 今戸焼 誤「今戸焼は、東京…」、正「今戸焼は、現在の

東京…」。

128 頁 13、(二二ウ二三オ) 本文一行目「これも同じく役者にて」

は声色遣いの決り文句。「…大昔は、うけとりたりやその次は、

これも同じく役者にて、市川海老蔵で、頼みます、そこらの仕

出しは市川の海老蔵でと止めて直に遣ひだし、五人とか七人と

か遣ひ終りて留めに、短き科白の様なものを云ふこと定まり

なり。その云ひ形は、長居はおそれ有明のなど云ひ出して、

こゝらでちよつと留袖や振袖さまへの御暇で、とホ、敬つて申

すと云ふやふなことを云へり(『守貞謄稿』)。

135 頁*6 誤『蝶山崎踊』、正『蝶鶴山崎踊』。

本稿をまとめるに際し、延廣眞治先生、木村八重子先生に御教示賜

りました。深謝申し上げます。

(おおや・たえこ／本学准教授)(おかじま・ゆか／本学大学院博

士後期課程学生)